

「自校教育の到達点と今後の課題」

日 時：2009年1月24日（土）13時00分～17時00分

場 所：立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館3階多目的ホール

第1部 事例報告1

九州大学 折田 悦郎 氏（九州大学 大学文書館 大学史資料室長）
明治大学 別府 昭郎 氏（明治大学 大学史資料センター長）
京都大学 西山 伸 氏（京都大学 大学文書館）

第2部 事例報告2

立教大学 豊田 雅幸 氏（立教大学 立教学院史資料センター）
名古屋大学 山口 拓史 氏（名古屋大学 大学文書資料室）
東北大学 羽田 貴史 氏（東北大学 高等教育開発推進センター）

第3部 討論

コメンテーター 寺崎 昌男（立教学院本部調査役、立教大学 大学教育開発・支援センター顧問）

本学代表挨拶：前田 一男（立教大学 立教学院史資料センター長）

司会・進行：山田 裕二（立教大学 全学共通カリキュラム運営センター
総合教育科目担当部会長）

<開会挨拶>

○司会（山田） 定刻となりましたので、始めさせていただきます。

今日は本当にたくさんの方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。また、ご登壇いただく先生も遠方より来ていただきまして、どうもありがとうございます。

本日、司会を務めさせていただきます、立教大学全学共通カリキュラム運営センター総合教育科目担当部会長の山田裕二と申します。所属は理学部数学科です。

本日は自校教育、もしくは自校史教育ということでお集まりいただきました。登壇いただく先生方にも、皆さまにも、率直に忌憚なく議論していただ

きたいと思いますので、最初に少し私の自校教育に対する率直な、個人的な感想を述べたいと思います。

私が大学生だったのは、もうだいたい25年前ですが、もしそのときに自校教育という科目が大学で展開されておりましたら、私は絶対に受けなかったと思います。つまり、自分の大学が自



分の大学の授業をするなど、極めてあやしい態度であると感じて受けなかったと思います。最近の学生は、そういうことをあまり感じるようではなくて、極めて素直に受けるような印象を持っております。なおかつ、自校教育というのは、いろいろな大学が世の中から受ける要請のなかで、ひとつ明らかな効果を持った授業展開だということが最近わかってきているように思います。

今回のこのシンポジウムは、立教大学が全学共通カリキュラムのなかで展開しております立教科目。自校教育はそのなかに入っております。それに対して特色GPの予算をいただき、3年前に「自校教育—その意義と可能性を探る」ということで、同様のシンポジウムをさせていただきました。そのときには、今日もおいでいただいております京都大学の西山伸先生、それから九州大学の折田悦郎先生、それから明治大学からは渡辺隆喜先生にご登壇をいただきました。本日は明治大学からは別府昭郎先生にお越しいただいております。前回のシンポジウムの時点で、先駆的な大学が自校史教育を展開してから4年から5年が経っておりまして、さらにそこから3年が経ちました。自校教育が展開され始めてからおよそ10年が経ちましたので、今回は、立教大学としてはGP事業の最終年度ということも踏まえまして、「自校教育の到達点と今後の課題」ということでお話をいただき、討論を願いたいと思っております。もちろん教養科目の一環として、歴史教育、教養教育、初年次教育としての自校教育もありますけれども、そこから踏み出して、大学のなかでの教育はどうあるべきか、教養教育はどうあるべきかということについても、ご意見を頂戴できればとありがたいと思っております。

今日は時間も限られておりますので、

お越しいただいた上で大変恐縮なのですが、お一人20分でお話しいただき、会場の皆さんからのご質問はお手元にございます黄色い紙にご記入いただいたものを、事例報告の後に回収し、討論の際に整理したものを、私の方からご紹介させていただければと思っております。青い紙のほうにはご感想をいただき、シンポジウム終了後に回収させていただければと思っております。

名古屋大学の山口拓史先生より、名古屋大学で出しているしゃるブックレットその他の資料をいただいております。ピンクのボックスの中に入っておりますものを、回覧させていただきたいと思っております。

また、別府昭郎先生から、明治大学の資料センターの案内、図録、写真などのようなものが入った明治大学資料センターの案内というものも頂戴いたしました。部数が限られておりますが、お持ち帰りいただいてもよろしいということなので、よろしく願いいたします。

それでは、最初に、本学、立教大学院史資料センターのセンター長の前田一男から挨拶をさせていただきたいと思っております。

<本学代表挨拶>

○前田 ただいまご紹介にあずかりました、立教大学院史資料センターでセン



ター長をしております前田と申します。主催者を代表いたしまして、ひとことご挨拶を申し上げます。本日は、東京は今年で一番寒い日だったようです。天候の悪いなか、あるいはそろそろ学年末や入試も近づいているご多用のなか、こんなにもたくさんの方々にお集まりいただきまして、ありがとうございます。このシンポジウムへの関心の高さが、この参加者の多さに、そのままあらわれているのではないかと思います。

今、山田のほうから概略の説明がありましたけれども、自校教育は全国の大学で近年ますます高い関心と呼んでいるテーマになってきています。前回のシンポジウムにおきましては、およそ二つのことが確認されたのではないかと私は思っています。一つは、所属する大学に対する帰属意識、スクール・アイデンティティー、あるいはその学生自身のアイデンティティーというものを、どのように涵養し、養成していくか、その課題を自校教育が担おうではないか、ということがありました。

もう一つは、その大学の歴史を通じて、日本の社会さらには近代日本の歩みを学習するということが目指せるのではないかということです。つまり、自分の大学を通して、社会や歴史とのつながりをつけていくことで、社会認識、歴史認識を獲得していく教養教育としての自校史教育が有効ではないかということでした。その2点が、前回のシンポジウムの記録を読ませていただいて、私なりに確認させていただいたところでした。

ところで、私は立教大学の出身なのですけれども、1975年に文学部教育学科に入学しました。そのときに学科ガイダンスがありまして、本日コメントーターを務めていただく寺崎昌男先生が教務委員でいらっしゃいました。新入

生に対して『履修要項』をいろいろ説明されるわけですね。「諸君は大学に入学してきて、読み書きもできるのだから、『履修要項』をちゃんと読めばわかるので、私の説明はさほど必要ないかもしれないけれども」云々と仰ったところで、先輩の学生が食いつきました。「障害児はどうなるのですか」と。新入生にとっては、そのやりとりはいささかカルチャーショックでありました。先輩がこういうところに来て、社会的な文脈から教員を批判するのか、それが大学という場なのかと、そのこと自体に、多少の違和感と非常な驚きを持ったことを鮮明に覚えています。しかし、最近では、山田のほうからもありますが、学生諸君はどうやって自分と社会をつなぐのか、そのつなぎ方のありようを懸命に模索しているように思うのです。その課題に対して、あなたがいる、あなたが所属している具体的な出発点から、ともに海路を見出していこうとする試みが、この自校教育の実践になるのではないかと思います。

本日お集まりいただいた先生方は、全国の大学で自校教育を実践しているらっしゃるなかで、おそらく今考えられる最も相応しい方々だと思っています。コーディネーター役の寺崎先生にもいろいろとご苦勞をおかけいたしました。立教学院史資料センターとしても、この企画に全面的に協力しようということで、今回も加わらせていただきました。自校教育をしていく大学側の課題として、どうかたちで自校教育が実質化できるのか。学院史資料センターの役割は、研究機能、アーカイブ機能、教育機能、展示機能といろいろありますけれども、この議論を通じて自校史教育におけるセンターの役割と課題をさらに自覚したいと思っております。

「特色ある大学教育支援プログラム」、

いわゆる特色 GP ですから、この GP のシンポのなかで議論されそしてそれが実践されていくことが、他大学の一つのモデルになることが期待されています。活発な議論をしていただきながら、自校教育にいろいろなかたちで示唆を与えられるような、またここで獲得された知見が他大学の有益なモデルになるような、実り多いシンポジウムになることを祈念いたします、私の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

＜第一部 事例報告1＞

○司会 それでは、九州大学大学文書館の大学史資料室長でいらっしゃる折田悦郎先生に最初にご登壇いただき、お話をお願いしたいと思います。

折田先生は大学アーカイブス論の専門家でいらっしゃいますので、自校史教育とその背景に占める大学資料センター、アーカイブセンターの大切さなどについてお話しいただけるのではないかと思います。よろしくお願いいたします。

事例報告1-1 九州大学

○折田 ご紹介いただきました九州大学の折田でございます。3年前にご当地で基調講演をさせていただきました。大学文書館になったばかりの九大の取り組みをお話ししましたが、若干は後述しますが、そのときの話がいかにか大言壮語であったか、今は汗顔の至りであります。のっけから元気の無いお話で申し訳ないのですが、最初にこの点をお断りをさせていただきます。資料は一枚、A3表裏のもので。

九大での自校教育の試みは、今から10年ほど前の1997年後期に、先ずは少



人数ゼミ「九州大学の歴史」として始めました。国立大学としては最初として、九大独自のプロジェクトで試行的に実施しました。資金を3年間で1,800万円ほど費いまして、開始したものです。授業のあいだには招待講演やシンポジウムを行い、また学生達の感想・アンケート・2年後の追跡調査等の報告書も出しましたが、なかでも大きかったことは、教科書『大学とはなにか—九州大学に学ぶ人々へ—』を製作したことです。これは、最初「九州大学の歴史」だけの開講でしたが、受講生の中から、もう少し幅広い、大学の様子も知りたいということで、当時の大学史料室の専任・兼任の教員が執筆し、販売もいたしました。その目次が資料1です。

ところで、前回も述べましたが、これらの授業を始めた最大の理由は、九大本体の歴史と密接に関連しています。九大の前史は、明治10年代の福岡医学校にまで遡りますが、直接には明治36年(1903)の京都帝国大学福岡医科大学という、京大の分科から始まり、これを統合する形で、8年後の明治44年(1911)に新設の工科大学が置かれ、以来九州帝国大学となりました。今から約100年前のことです。医科と工科という巨大なキャンパスが、近くとは言え2キロほど離れて存在し、創立記念日も、大学全体のものより医学部の方が8年早く挙ります(卓近な例ですが、

創立百周年に関わるいわゆる募金活動にも、これら創立年の違いは大きな影響を与えています)。このように、一つはキャンパスの分散(現在では学生の居るキャンパスだけでも6つあります)、二つ目には、その結果としてアイデンティティーの欠如などが、10年前の教員間で話題となりまして、移転を控えた大学としては、先ず自分達のいる大学について“学ぶ”ことから始めなければならないのではないかと。そうしないと“九大人”としてのアイデンティティーが保てないのではないかと。などといった一種の危機感から始まったのが、九大での自校教育です。この点が、建学の精神に注目し、また自らの大学を近代史の中にきちんと位置付けようとする、先行私立大学の事例とは大きな違いだと思えます。

次に資料2は、その総合科目「大学とはなにか」の受講者数を、資料3は「九州大学の歴史」の人数を、資料4はそれらの講義年度等を表にしたものです。資料2では最初300人(それも初回は希望者が600人近くあり、選抜した結果ですが)ほどでした。それらと比べますと、最近3ヶ年はご覧の通り大幅に減少しています(2006年29人、2007年28人、2008年15人)。これは「九州大学の歴史」(資料3)の方も同様でして、先年のご報告では、①同時に開催される講義・ゼミが増えたためだと思われる。したがって、2005年からは「九州大学の歴史」の方を「大学とはなにか」と統合して、「大学とはなにか—九州大学を通じて考える—」を開始したこと。②その結果、総合科目での私の「九大史」に関する時間が増えると同時に、運営上は色々な連絡が取りやすくなったことなどを申し上げました。しかし、統合した年こそ123名でしたが、以後は見事に減りました。実は激減した年から、総合科目の時間帯が全学的に90

分(1コマ分)遅くなり、その影響を受けた他の科目もありますので、この点が我々の授業にも無関係とは言えませんが、後で言いますように、そのような状況でも受講生が増えている科目もあります。また「九州大学の歴史」と「大学とはなにか」の両方の授業を統合した時の予測として、「全体的な面白みは、別立ての時の方があったような気がする。『九大史』の方も、例えば6キャンパスを一つずつやるとしても、時間が必要であろう」といった、お話をしておりましたので、本年からはまた、元通りに二つのコース(「九州大学の歴史」と「大学とはなにか」)に戻しました。

ところで、ここで当然、何故、このような減少になったかの原因を考える必要がありますが、今言いました時間割の問題以上に、一つは、おそらくかなりの部分、教員の側に問題がある。これは私だけの意見ではなく、後でも少し触れますある先生の見解でもあります。やはり、我々教員の側に、教科書を製作した時のような熱意が無くなったのではないかと(コーディネーターが重要な会議等で、オリエンテーションに参加できないとか)、マンネリ化が進んだように思います。資料5は現在の「大学とはなにか」の担当者ですが、これと前掲資料1(『大学とはなにか—九州大学に学ぶ人々へ—』の執筆者)では、大部違ってきました。当初と比べますと、退官者が4人、多忙で講義の担当ができなくなった先生が3人おられます。その空いた分を資料5のように、新しい先生3人と私共で補っている訳ですが、表(資料)に見る通りの状況です。

次に受講生減少の理由の二つ目として、学生さん達にも変化が見られるようになったと思います。先ほど少し述べましたが、我々教員のあり方を問われた先生のお一人からは、「ジリ貧パ

ターンから抜け出すには、全面的な内容組み換えしかないだろう。ジリ貧の理由は簡単にはわからないが、ひとつは「ともに考える」よりも「知る」方に、学生の興味がシフトしているのではないか。実用的な情報、例えば、研究者志望者への就職難等のネガティブなものも含む情報提供に重点を置くのがよいかもしれません」というご意見（メール）を頂戴しました。

資料6は、その実例になるかどうか即断できませんが、「大学とはなにか」と同じ時間、同じ場所（六本松キャンパス）で行われた「伊都キャンパスを科学する」の講義内容等とその受講者数です。こちらの方は、私も一コマ分担任していますが、逆に増えている。その理由の一つは、新キャンパス（伊都キャンパス）に関するバラエティに富んだ講師陣と、もう一つは初年次生の、これから学ぶ新キャンパスに対する強い関心、といったことが考えられます。今まで旧教養部があった六本松地区は今年度限りで廃止され、新入生全員が伊都キャンパスに入学しますが、これまでの様子から見て、「伊都キャンパスを科学する」の場合、既に移転が完了した工学部生の受講が多いのは（絶対数が多いとは言え）、納得できる結果です。

我々の授業における受講生減少の理由の三つ目としては、これはもうほとんど言い訳に近いのですが、最初の理由と関係しまして、担当者（教科書執筆者ですが）の方達の多くが、部局長等に就任されたりして多忙になったことと、同じく、法人化やキャンパス移転、執行部の交代等とそれらにともなう膨大な書類作りなどに忙殺されたこと。大学文書館自体も大規模な引越しを2年がかりで行い、また移転の進展で膨大な事務文書の移管等があったことなども、弁解ついでに申しますと無関係

ではないように思われます。

そろそろまとめに掛かりますが、しかし、そうは言っても、私自身は自校教育自体の必要性・重要性については、少しも疑いを持っておりません。ジリ貧九大の例では説得力が無いかも知れませんが、本年度（昨日が最終講義でしたが）、復活しました「九州大学の歴史」の受講生は最初が25人—最終的に単位が出せそうな学生さんは20人ほどですが一、彼らに匿名の感想を一時間ほどかけて詳しく書いて貰いましたら、良かった点、改善点を含めて、資料7の10年前のものとはほとんど変わっていませんでした。ただ「普段の授業とは違った気分で受けられた」「意外な知識を得た」、また私自身は九大を中心にやったつもりですが、「テーマを九大に絞って欲しかった」というものや、「他の講義（一般教養や言語など）のように、自分自身のスキルが上がった感じはしなかったが、例えば就活等で自分の大学について尋ねられた時など、堂々と語れる力と自信はつきました」というような感想がありました。その他では、ビデオ鑑賞やキャンパス見学、自分の学部の歴史、大学「紛争」（これはお父さんが九大生で、学内を「進行」したと書いていましたが、「行進」「デモ」のことでしょう）、このような点にやはり学生達は興味を持つようです。

最後に、来年度は一応、語弊を恐れずに言いますと“様子見”のために本年同様、「九州大学の歴史」と「大学とはなにか」の二本立てで行く予定です。先に述べましたように、工学部生と1・2年生全員が本年4月から新キャンパス（伊都キャンパス）に揃います。その時には、また新しい動きが出て来るだろう。例えば理・農・法文系・芸術系は、専門課程になりますと、新キャンパスから再度旧来のキャンパスに散らばります。このように九大はあと10年以上、

統一キャンパスでない変則状態が続く訳です。もしかしたら専門学部の歴史に学生達は興味を持つかも知れません。常に「全面的な組み換え」を念頭に置きつつ、新しい授業を模索して行くしかなのですが、新キャンパスの事柄も取り入れながら、そして先達であります私学の方達が目指されている近代史あるいは地域（史）の中に、自校をきちんと位置付けるような講義、それから教育にはやはり『教科書』が大切ですので、新しい教科書の編集が今後の課題だと思っております。

なお、九州大学の「百年史編集室」が大学文書館内に設置され、私も副委員長として関与することになりました。8年間の予定ですが、准教授、助教の計2名を配置して貰い、現在公募・選考中です。実は最初の教科書を書かれた先生達の多くは、九大75年史編集の中心メンバーでした。百年史の場合もその成果・マンパワーを活用することができる。私が自校教育の展開に悲観しない理由が、百年史（年史編集）にもあるということ、それから百年史や六本松（旧教養部）移転に関連して、私自身もマスコミへの対応やホームカミング・同窓会での展示・講演、市民講座での「九大史」の講師等に駆り出されておりますが、学生達だけでなく、同窓生・父兄・市民の方々の「九大史」に対する関心の高さを改めて強く感じているところです。最後にこれら二点を追加いたしました、雑駁な報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

○司会 折田先生、ありがとうございました。

次に、明治大学大学史資料センター長である別府昭郎先生にお願いしたいと思います。

別府先生はドイツ大学史が専門でい

らっしゃいます。今回のシンポジウムの中で、私学は立教と明治大学の2校だけとなっております。国立と私学では自校教育の意味合いも違って来る部分もあると思いますし、国立では教員資産、教員と学生数の比が私学とは全く異なり、自校教育にかけることのできる資産、クラスサイズなどに国立と私学の間の差があると思います。

また、設立の経緯が地域的、政治的、地理的に極めて明確な旧制帝大と、設立の過程がまったく違う私学では、学生に教えられる内容、大学のアイデンティティーというものがだいぶ異なっているように感じます。例えば立教は教員数が約400人、学生が約1万8千人ですけれども、全学での体育の授業を除いた講義系の教養教育科目というのは約300です。おそらく明治大学も似たような状況だとは思いますが、そのなかでの自校教育、歴史教育、教養教育ということについて、ご意見を頂戴できればと思います。よろしくお願いいたします。

事例報告 1－2 明治大学

○別府 明治大学の別府と申します。皆さん方にお配りしました「明治大学史教育の到達点と今後の課題」というレジュメで説明していこうと思います。

私は寺崎先生から教養を受けまして、押しかけ弟子と私は自己規定をしています。さて、レジュメの一番上で記しているように、私は、資料センターは大学の精神的機関車であると思っております。大学とは何かという問題を、今、折田先生もおっしゃいましたけれども、大学というところは、父母から、学生からお金を取って何も物質的見返りはないところなのですね。何もないのではなくて、実は精神的な価値を与えるところだと思っております。そういう



ことを考えますと、特に私学にとりましては、資料センター、アーカイブスは、大学の精神的機関車、牽引車と考えていいだろうと、私はいつも思っております。

お配りしたレジュメの3番目の項目「センターの主な仕事」をご覧ください。今、私は明治大学史資料センターの所長をしておりますが、センターはどういう仕事をしているかということが書いてあります。のっけからすみませんが、⑨を消していただきたいと思えます。⑨は、⑤「明治大学の各部署が作成した文書の蒐集と整理」や⑥「明治大学の歴史そのものの研究と展示」に吸収されると思えます。どういう具体的仕事をしているかと申しますと、それは、皆さん方のお手元にあります「明治大学史資料センター案内」と「明治大学史資料センター大学史展示室」という二つの資料で、どういうことをしているかはある程度わかると思えます。

それから、紫色の「明治大学史料センター案内」を参考にさせていただければいいと思えます。どういうことをしているか個々に申しますと、総合講座、これはまさに自大学史の講座であります。この運営を今年から担当しております。対象は学生です。それから、先ほどテキスト・教科書という話が出ておりましたけれども、本日は持参いたしませんでしたが「明治大学史」は厚いのが4冊ございます。これはあま

りにも大部なので、総合講座では使用できないので、小史をつくろうと、今、準備しております。この議論はかなり進んできております。

それから、リバティ・アカデミーという、社会人向けの講座なのです。対象はもちろん社会人ですが、これを行います。③は、今年行いましたリバティ・アカデミーの講座の内容でございます。

それから、④は「Mスタイル」という、今の学生に受けるようにカラフルになっておりますが、これは学生用の冊子、チラシです。これに必ず資料センターの誰かが「大学史の散歩道」と題して書くことになっています。この「Mスタイル」の執筆という仕事があります。

それから、⑤になります。明治大学は今9学部ありますけれども、そういうところで作りました文書を蒐集し、整理、研究しています。ただし、これはアーカイブスを専門に研究しておられる先生はわかると思えますが、各部署がつくった文書を全部集めて、大学史研究に資するには大変な苦勞がいます。なかなか集められないということで、今、別に学内文書規定を見直して、できるだけセンターに集まるようにしようという工夫を考えているところです。これは非常に難しい学内の調整を含みますが、これをしようと思っております。

⑥ですが、明治大学の歴史そのものの研究と展示をちゃんとする。これは、研究者向け、大学の教員向け、学生向け、一般向けにするために、展示を精力的に行っています。

⑦ですが、明治大学に関する文献や文書の蒐集。つまり、学外の人が明治大学に触れている文書、書いておられる文献を集めることです。

⑧は、著名な卒業生。さしさわりが

あるものですから、生きている人はできません。特に物故者を中心に集めております。

このようなことを行って、つまり学生の教育から社会人、大学そのもの、それから大学の外部のこと、大学に関するすべてのことをセンターで行おうと考えております。

3番目の「センター主な仕事」を先に説明いたしました。

1番目の「自校史か自大学史か」に戻りますが、今日のテーマは自校史教育になっておりますが、私はどうも大学と学校は、はっきり違うという認識を持っております。ここではヨーロッパとか、私が専門にしておりますドイツの大学でも、大学とギムナジウムははっきりと違う叙述をしているものですから、私も歴史的経緯も、教育目標も、与える資格も、教員のリクルートメントも違うという意味で、大学と学校は違うという認識をもっています。ですから、自校史という言い方ではなくて、大学史とか自大学史という言い方を採用しております。

これは、私が事務局長をしておりました全国私立教職課程連絡協議会においても、自校という言い方と大学という言い方が混在しておりましたから、大学に統一いたしました。意思決定機関の協力を得て、全私協では、大学という言い方を採っております。

それから、なぜ自校史という言い方が一般的なのでしょうか。マスコミはほとんど自校史を使っております。これは二つ理由があると思います。一つは、歴史の古い大学は自校史と言っています。つまり、昔は学校だったので。明治にしても立教にしても早稲田にしても、学校だった。歌もその時期にできていますから、校歌という言い方をするので。大学歌ではなく校歌なのです。やはり古い大学ほど、自校

史と言いたがる。言っている面があるのですけれども、大正7年の大学令以降、私立専門学校は大学になっておりますから、僕は大学と言うべきだと思っています。これが一つ。

それからもう一つは、2番目の「大学にかんする法制」に書いておきましたが、大学に関する法制というものを考えてみますと、日本には戦前は大学令がありました。大学に関する法律がございました。ところが、戦後は1968年、1969年の大学紛争のあとにできた大学管理法だけがあって、大学の目的とか、理念というものは、すべて学校教育法の一部なのです。ですから、戦後は独立した大学の法令がないということが関係していると思います。

こういう理由によって、大学史ではなくて自校史という言い方が一般的になってきたのではないかと思います。

ただこれは、資料1の『『教育学研究』第74巻第3号(2007年9月)』に書いておきましたように、私も寺崎先生に教えてもらった人間の一人です。昔初めて聞いたときには、個別大学史とか、沿革史とか、言っておられたのに、いつ自校史と言われるようになったのかなと疑問に思っています。

4番目、今日のテーマであります到達点ということですが、これは資料6に学生の感想を入れておきました。ただし、学生、受講生は変わります。毎年変わっていきます。そうしますと、なかなかどこが到達点かということは、非常に難しい部分があります。私が担当しております授業、総合講座の「近代日本史と明治大学」なのですが、そこで学生に感想文を書いてもらいましたので、それを入れておきました。そうしますと、狙いはある程度、達成できたかなという感じがしておりますが、不十分な部分もあります。悩んだ点は、やはりどういう原理で自分の大学の歴

史を組み立てるかで一番悩みました。解決策の第1番目は、やはり歴史だから時系列で配列しようということです。それから2番目は、例えば明治36年の専門学校令とか、大学令とか、新しい学部をつくったというようにエポックメイキングな出来事を次に並べようと。それから、先ほど折田先生もお触れになっておりましたが、University Identity、UIをどうやってつくるかという問題です。これは教育の専門になるかもしれませんが、やはり知識を与えて意識を変えていくということを考えました。自分の大学に関する知識を与えて学生の意識を変えていくこと。そして、できるだけUIの方向、つまりアイデンティティーをつくる方向でやっていこうと思いました。それと関係しますが、4番目は、研究よりも教育を重視すること、すでに開発された知識を学生、もしくは社会人に与えていくという意味で、教育を重視するということです。このようなことを考えました。自大学史教育が始まった時点の原則を、今言いましたけれども、学生の感想は資料6です。資料6は2つありまして、枝番の1と2です。

こういう状況で、次はどうしようかと課題を考えています。1997年に始まりましたから、今10年たちました。それで、今、見直そうという動きがあります。私もその一人ですけれども、やはり時系列とか、大学にとってのエポックメイキングな事件、あるいは教育を重視するということは変わらないですけれども、第一は、視点としてトポグラフィです。つまり、大学の地理学ですね。実は立教も場所を変わってきておられるのですよね。先ほど折田先生も、六本松の教養課程、昔、福岡高校があったところだと思いますが、あそこがもうすぐなくなるという話をうかがいました。そういった意味での大

学史の地理学という視点が必要になってくるのではないかと思います。

明治大学も、最初は旧島原藩邸の上屋敷跡で始まったわけです。今、そこは銀座にありますけれども、千代田区と中央区の境目の千代田区の土地です。そこから今の駿河台に移ってきたわけです。そこは今キャンパスのある駿河台の道路一本へだてたところです。そして今のキャンパス、これは明治大学の中心地、学長がいるところというように変わってきたわけです。そのほかに、ご承知のように、和泉キャンパス、それから生田キャンパスもございます。今3キャンパスあるのですよね。そうしますと、なぜ和泉キャンパス、明大前ですが、ここに移ったのか。それから、生田、向ヶ丘遊園のちょっと向こうにあります、なぜ生田に移ったのか。工学部は、今、理工学部と申しますけれども、駿河台から移るのですよね。ですから、どうしても大学の地理学みたいな発想が必要になってくると思っています。これは他の大学の講義テーマをいくつか見ましたけれども、ちょっと弱いのではないかと。私の大学でも弱いのです。ですから、今後の課題の一つは、やはりそういう地理学的な発想を入れるということです。

第二は、卒業生の発掘です。教職員も学生も知らないという人がいるのです。初期のころは非常に意識されていても、私たちの代になってくると知らない人が出てくるわけです。一つだけ挙げますと、小田急電鉄をつくった人は実はOBなのです。利光鶴松という人ですけれども、そういう人や、例えば二・二六事件の判決を下した人もOBなのです。そういったことは、昔の人は知っていたらしいのですけれども、私たちは意識的に学ばないと、もう知ることができなくなってきているという意味で、卒業生の発掘は必要です。

財界や法曹界、文学界、スポーツ界、芸能界、いろいろおられますが、そういう人たちを発掘してきて、その人たちがどういうことを学んで、何学部を卒業なさったのかということ进行研究しようかと思っております。

これは、やはり生きている人はちょっとやりにくいことがありますから、だいたい死んだ人、物故者を扱うようにしております。生きている人をやりますと、自薦、他薦いろいろあって非常に難しい状況になってくるということもあります。私自身もそれを経験しておりますから、やはり物故者を中心にやっっていこうということでありました。

それから、今後の課題の第四は、私たちには実はテキストがないのです。ないものですから、学生の教育にも社会人の教育にも役に立つという意味で、小史をつくらうとしております。現在、各章が固まり、執筆責任者が決まった段階です。その小史をまず日本語版をつくることをまず考えています。それを総合講座で使うということを考えております。そのほか、英語版、中国語版。中国語版は、留学生が多いのですね。それから韓国語版もそうです。これが2番目です。

書いておきませんでしたけれども、3番目の課題があると思っております。先ほど言いましたように、総合講座をはじめ10年たちましたので、やはり全体的に「近代日本史と明治大学」というテーマを見直そうという動きがあります。それと、もう一つは、総合講座ですから、やはり卒業生やOBの方にこれにどうかかわっていただくかということを検討しなければいけないと思っております。今でも若干はOBの方にかかわっていただいておりますが、やはりどうしてもアイデンティティーをつくるということになりますと、OBが大きな役割を果たすと考えておりま

すから、そういうことを今、検討しております。

以上、簡単に明治大学史教育の到達点と今後の課題ということでお話しさせていただきました。どうもありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。少し私が時間厳守と申し上げ過ぎたせいか、皆さん早めにお話しただいて、時間に少し余裕がございますので、少し質問をさせていただきます。いろいろなものを拝見すると、明治大学ではUniversity Identityということで「開発主義」であるとか「自由討究主義」という言葉が挙げられているようです。今お話しいただいた中にありました、卒業生の中で目立つ方を紡いでいくことと、そういう言葉というのは大学の自校史として結びつくものでしょうか。

○別府 「個を強くする大学」というのが、受験界で本学のキャッチフレーズになっておりますが、これは今おっしゃった岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操という3人の人たちがつくった文章の中に「権利・自由・独立・自治」というのがありまして、また大学会館に三木武夫がその言葉を大理石に書いたものがありますが、今の学生にはピンとこないということで、どのようなデフォルメといいますか、どういうかたちで表現すれば今の学生諸君の心にピンとくるだろうかと考えまして決めた言葉が「個を強くする大学」です。基本的に「個を強くする大学」と建学の理念は表裏一体のものであるという認識を持っております。

○司会 ありがとうございます。私学にとっては、建学の精神と実際というのはなかなか難しい問題をはらんでい我想います。別府先生、どうもありがとうございます。

では、次に京都大学の西山伸先生に

お願いしたいと思います。西山先生は前回のシンポジウムにもご参加いただきまして、今回もお願いしております。京都大学の大学文書館にいらっしやいまして、『京都大学百年史』全7巻の編纂をされていらっしやいます。自校史のみならず、大学教育、教養教育についてもご意見を拝聴できればと思います。よろしく願いいたします。

事例報告 1-3 京都大学

○西山 ご紹介いただきました京都大学大学文書館の西山と申します。どうぞよろしく願いいたします。

のっけからでございすけれども、今日のこのシンポジウムに向けて準備をしておりましたが、もしかしたら私自身がしていることは、言われるところの自校教育ではないのではないかという気もしてきております。なぜそう思いだしたのかということは、時間がありましたらお話をしたいと思います。

とりあえず、私は自分の大学で、京都大学の歴史を素材とした講義を行っているということは間違いございません。本日はどういう講義を行っているのかということ、実際の授業で使った資料を用いながらご説明していきたいと考えております。

時間もありませんので、さっそく内容に入ってまいります。まず、講義の概要というところからまいります。私はちょっとほかの大学の例とは違うところがあるかと思いますが、学内の別の部局の先生と二人でずっとこの授業を行ってまいりました。溝上慎一さんとおっしゃる高等教育研究開発推進センターの准教授、青年心理学がご専門ではなかったかと思いますが、もともとこの授業はその方の発案で、その方が私を引き込むかたちで始まったものでございます。科目名も、「現代の大学・

大学生論」というタイトルにしておりまして、溝上先生が、現在に近いところの大学や大学生の話をされて、私がある前提としての歴史の部分、京都大学の歴史を中心にお話しするというかたちで、二人で半年間の講義を分担するかたちで行ってまいりました。全学共通科目という、昔の一般教養ですから、一、二回生が中心ですけれども、べつに三、四回生の受講を拒否するものではありません。前期、13回ありますので、だいたい毎年私が7回行っております。今年ちょっとカリキュラムの都合と私自身の都合がありまして、6回しかできませんでしたが、毎年7回ということですから定着しておりました。

今年度の受講者は、135名ということで、全10学部から受講生が出ています。

そんなことで、溝上先生の発案で始まった授業ではありますが、2002年度から行っておりますので、7年目が終わったところです。来年度からは、発展的解消と言いますか、それぞれの道を進みましょうということで、私が初めて単独で歴史の授業を行うことになりそうです。

この授業の評価ですけれども、毎回、講義終了後に、受講者にコメントを出してもらっています。いつもB6ぐらいの紙を、話が終わったあとに配りまして、15分ないし20分ぐらいの時間で学生に書いてもらって提出してもらっています。それは記名式で、当然、評価の対象にすると。あとで時間がありましたらご紹介いたしますけれども、なかなか面白いです。それとプラス、学期末に試験を行います。

ちなみに、今年度の試験問題、私が担当した分ではどんな問題を出したかというのを、レジュメに挙げてあります。あとでお話ししますが、だいたい学徒出陣絡みとか、大学紛争絡みとか、

新制発足絡みとかいうところから問題を出すようにしています。

講義の内容ですけれども、私は基本的に7回担当するというので、ここ数年間は、「1. 帝国大学の始動と京都帝国大学の創立」から、「7. 大学紛争とその背景 (2)」までの7回、ほぼこの形式でだいたい定着してきております。やはり学生が非常に関心を持ちますのは、私の経験では戦争とのかかわりが一つ。それから、大学紛争というのがもう一つ。そういうことでありますので、実質7回のうち、4回がその両者をテーマとするというかたちにしております。

3番の「戦争と大学」では、ともすれば大学は戦争との絡みでは被害者の面だけで語られることが少なくない。例えば、学問の自由、研究の自由が圧迫されてひどい目に遭ったとか、工場に労働に連れて行かれて授業がまったく行われなくなったとか、学徒出陣で何人亡くなったとかいうようなことで、ともすれば被害者としての側面で語られることが多いが、特に京大のような帝国大学は、国家の大学であるから、そういうことだけではない。例えば、儀式や行事、あるいは教育のなかで戦争というものがいかに語られるようになったとか、あるいは、私はもちろん専門ではないわけですが、できる限りの範囲で、例えば哲学の京都学派というものが、当時どのような言論を展開していたか。あるいは京大の地政学というものがいかに戦争を正当化するような役割を果たしていたか。理系で言えば、原爆の開発が行われていたというような話をこの3のところでするようにしております。

4番では、あとで詳しく触れることができるかもしれませんが、学徒出陣を主な対象としております。

6番と7番で、大学紛争が二つありま

すのは、最初のほうでは、1995年に、NHKが『そのとき日本は』というシリーズの番組を制作して、そのなかで東大全共闘を特集した回がありまして、これがちょうど1時間ほどですが、なかなかよくできた番組だと私は思いますので、これを見せます。2回目の(2)のところで、京大の話も含めた紛争全般の話をする。だいたいこのような構成をとっております。

今日ここでお話をさせていただくにあたりまして、どのようなかたちをとるのが一番いいのかと思ったのですが、やはり実際の授業で使っている資料をそのままお出しして、私のやっていることはこういうことだとお示しするのが一番いいのかなと思いました。

どの回が一番いいかといろいろ考えたのですけれども、結局、自身の専門にも一番近いところでもある4番の「出兵する大学生—学徒出陣—」というのを実際に素材として、今日ここにお持ちしたわけです。

だいたい授業の形式としては、ビデオを見せる回以外は、毎回同じ形式をとります。A4で、その日にどういう話をするかということを示した資料。そして、A3で資料を出すわけです。これは年々増えてきて、毎年改定、改定をして、あれもじゃべりたい、これもじゃべりたいということで、どんどん増えていきまして、結局このときは、A3で8ページにわたります。その8ページ分の参考資料、どこを典拠にしているのかという資料一覧を必ずつけるということで、そこでこういったものを提示しています。これを90分ですということですね。

このときはどういうかたちで授業を展開したかということですが、この学徒出陣という言葉知らない学生はさすがにほとんどいないわけで、あるいは世間的にも、大学と戦争の絡

みのなかでは最も有名な歴史的事象かと思いますが、その実態はどうかということになりますと、名前の有名さに比べると、あまりにも知られていないと思います。そこでまずその制度的な側面をしっかりとつかんでもらいたい。その前提として、この学徒出陣という言葉は一体いつから使われだしたのかという話をこの史料1などでしています。法制度的な側面を最初のほうに史料で示したうえで、一体、大学のなかでいつ入学した人間が軍隊に行くのか。そして、行った人間はどういう学籍上の処理をされるのか、などの制度的な側面をまずしっかりとたどっておきたい。そのなかでまた、朝鮮や台湾出身の学生たちがどのような扱いを受けたのかということにも触れるようにしています。

2番目として、では実態はどうだったのかという話です。今年は、先ほど申しましたように6回しか授業ができませんでしたので、実は「戦争と大学」の1回目を飛ばしておりましたから、ちょっとだけ京大の戦争協力の話をしています。それはさておきまして、京大のなかでの壮行行事がどのように行われたのかとか、軍隊に行った学徒兵は軍隊のなかでどういう進路を取っているのか。それからもう一つ、このA3のレジュメのほうでは、3ページ目あたりから大きな表がたくさん並んでいますが、これは2006年度に私どもの大学文書館が、京都大学における学徒出陣の調査研究を行いました。つまり、大学の学籍簿から調べて、一体、何人軍隊に行き、何人戦没したのか。それまで明らかになっていなかった数値をとりあえず出すという作業を行いましたので、その表を出して、一体、文学部からは何年入学の人間が何人行ったのかとか、法学部や経済学部はどうだという話をしていったわけです。亡くなっ

たという記録のある人の戦没場所であるとか、例えば表5などでは、全学の復学年月とあるけれども、未復学の人86人いて、そのなかには、もしかしたら戦没者もいるかもしれないねという話などもしていきます。

今年度初めてしてみたのが、他大学や他国の大学との比較ということで、A3レジュメの4ページ目の表の7。これはこちらの立教でお調べになった例ですが、これを出して京大との比較はどうかと。外国の大学との比較もしてみたのですが、これはイギリスのグラスゴー大学の沿革史ですけれども、そこから引っ張ってきています。これももうちょっと来年度以降、準備の段階で広げていきたいと思っていますが、外国の大学と日本の大学ではどう違うかとか、そんな視点なども講義していくということをしました。

3番目としまして、「学徒兵たちの記録から」ということで、先ほどの京大の大学文書館における調査は、データの調査だけではなく、京大出身の学徒兵から聞き取り調査も行いました。そういったものも入れつつ、A3のレジュメの5ページ以降はそういったことですが、私がいろいろお聞きしている対談形式の資料がいくつか並んでいます。そういったものを一つの柱とし、それから、京大出身の学徒兵でさまざまな記録を残しておられる、それが出版されている方もいらっしゃいますから、そういったものも使います。それからもちろん、京大だけではなくて、例えば戦艦大和に乗り組んで、帰ってきて『戦艦大和ノ最期』という本を書かれた吉田満、彼は東大出身の方ですけれども、『きけわだつみのこえ』で有名な佐々木八郎、彼も東大ですが、そういった方の資料なども使いながら、当時、学徒兵たちが軍隊に入る前、あるいは入ってから、一体何を考えていたかという

ことを、できるだけ多くの資料を使って紹介していくと。それは、彼らがある意味、世代として定められた運命というものをいかに受け入れて、自身を納得させていったのかという過程をそこで示しているわけですね。

特に私が注目しているのが、社会学者だったと思いますけれども、森岡清美さんという方の提示されている「主体的役割人間」という概念です。学徒兵たちには、こういった考え方を持っている人間が多かったのではないかという話もしております。

ただ、それだけではなくて、例えば、もう非常に最初から戦争に批判的な学徒兵もいたという話であるとか、学徒兵とって、われわれはすぐ十把一絡げにしがちですけれども、実際は、例えばいつ、どういう状況で軍隊にいたのか。あるいは、軍隊のなかでどういう任務を行ったのかということによっても、戦争の受け止め方、それは戦後の考え方も含めてですけれども、まったく異なるという話も忘れずにしています。

そんなことで、とにかくできるだけ多くの資料を紹介しつつ、最後には、この学徒兵は悲劇の象徴のように言われているけれども、例えば8ページ目の史料26などには、「下からみた学徒兵」ということで、どう思われていたのか。つまり、彼らはもともと学生としての特権があって、徴集を猶予されていたのが停止されたのが学徒出陣なのですけれども、軍隊に入ってから非常に特権的なコースをとって出世をしていく存在であったということにも目を向けさせるような資料を配布したということです。

最後に、「おわりに」のところ、なぜこのような学徒出陣の調査研究を行うかとか、今われわれが考えるべきことは一体何なのかと。そのような話を

します。

とにかく、私の目的の一つとしては、一回ちょっと学生の持っているいろいろな概念、固定観念を揺さぶってやれというのがあります。この回では、学徒出陣とか戦争と大学ということに対して彼らが描いているイメージになるわけですが、受講生のコメントを見る限りどうもそれは効果があったようです。

次に、講義の意図ということに移ります。だいたいこのようにご紹介したなかで、ちょっともう、これは毛色の違う講義なのではないかと思いいなった方もいらっしゃるかもしれません。まず、テーマを徹底的に絞り込むということをしています。ただ、回数が少ないということが理由ではなくて、先ほど申しましたように、来年度からは私が単独でしますので、たぶん12、13回はあると思いますが、基本的にはこの形式をとっていきたいと。とにかくこれを90分でしておりますので、「頼むからもっとゆっくりしゃべってくれ」というコメントもあったりして、なかなか学生には気の毒な側面もあります。もちろんすべての資料についてコメントはしますが、線を引いているのは、要するに、授業ではそこを中心に説明して、講義のなかでは資料の読み方というか、この資料はこういうところに注意して読むべきだという話だけをして、あとは持って帰って読めという構成をとっています。来年度からはもう少しゆるやかなかたちをとりたいと思っています。

まず、そういったテーマの絞り込みを徹底的にするということです。それから、今申しました資料を多用すると。できるだけ多くの資料を示して、ある物事を多角的な側面で見たい。例えば、今日では出しませんが、滝川事件についてするときには、あれは

学問の自由をめぐる大学とファシズムの闘いだという側面も一方であります。それだけではなくて、滝川の、例えば人格的側面も含めた彼の問題性というものも語りつつ、事件の底流にはこういうことがあるのだよと。文字に書かれた資料だけではわからないこともたくさんあるのだという話などもするといったように、なるべくたくさんの資料を出して、一つでも多くの側面から物事を見てもらうことをしているつもりです。

私は教育学の専門家でも何でもありませんので、教養教育とは何かということに偉そうに語れる素養は何もないわけですが、私の考えるところの、少なくともこの大学の専門教育に入る前の学生たちに身につけてほしいものは、ものの考え方、ものの見方であります。私はたまたま歴史をやってきた者ですから、歴史的なものの見方や考え方を、学生に身につけてもらいたいと思っています。

「わかった気にさせない」とレジюмеに書きましたけれども、例えば、学徒出陣というのはこういう悲惨なものだったのねとかたちで、わかった気にはさせないで、揺さぶって迷わせて教室を出させたいと思っています。

そしてその素材として、みずからの大学があると。では、べつに自校教育でなくてもいいのではないかという意見もありえますが、そのとおりでありまして、ただ学生からしてみると、今みずからがいる足もとを素材とすると、非常にすっと入り込みやすいということで、素材としてみずからの大学を選んでいくということです。

そういうことですので、もしかすると、本日のシンポジウムの意図とはだいぶ違った方向になっているかもしれません。おまけに、報告をつくっている間の勢いで「付」というところまで

付けてしまいましたので、ついでですから、奮勇をふるってそこまでお話ししたいと思います。

昨年の夏に、IDEの大学セミナーが、たまたま京都大学で開催されました。「自校教育の行方—愛校心なき大学を憂う—」というテーマで、当日、主題が配布されました。そのなかにこのようなことが書かれていました。『『自校教育』の目的は、愛校心を育てることだけでなく、大学への帰属意識や共同体意識が欠如している最近の学生に対して、自校史や建学の精神を学ぶことを通じて自校に対するアイデンティティを涵養することにあるとされている。アイデンティティの涵養と自校への愛着心が、卒業後の母校へのサポートなどにもつながっていく可能性も高い』。うかつにも、私は自校教育の目的がこのようなものであるとはまったく知りませんでした。ですから、冒頭で、私が行っていることは自校教育かどうか、最近、非常に疑問に思っていると申し上げたのは、一つはこういうことです。

しかし、このようなかたちで、教育を行うことで、学生たちは批判的な、あるいは自分で物事を考える姿勢を身につけることができるのでしょうか。私はかなり疑問に思わざるを得ません。もしこのようなことが必要であるとすれば、これは講義の形式よりは、全学講演会のようなかたちをとってすればいいと思います。単位を出せば学生は聞かろうという下心が出ている気がして、私は非常に危惧を覚えるのであります。しかも、卒業生の母校へのサポートまでつながっていくところに書いてありますから、これはもう下心ではないわけですが、ここに至れば、これは一体、教育として果たしていいのだろうかという気持ちを、

私は正直なところ感じざるを得ません。

せっかくの機会ですから、もう二度とこういう場に呼ばれなくなっても構わないので、自分が行っていることと、ちょっと自校教育について感じていること、最近いいのかなと私はかなり思っていますので、そういう話を率直にさせていただきました。いろいろとご意見、ご批判等々聞かせていただければと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

○司会 西山先生、どうもありがとうございました。実に大切なポイントだと思いますので、のちの討論のときには、またご意見をいただきたいと思えます。

数分早いですが、プログラムどおり、14時40分まで休憩とさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

<第2部 事例報告2>

○司会 それでは、時間となりましたので、二部を始めさせていただきます。二部の一人目の登壇者は、当大学の立教学院史資料センターにあります豊田雅幸から、本学における自校史教育の例を報告させていただきます。豊田は『立教大学百二十五年史』の編纂を経まして、本学で自校史教育を担当しております。今回は、旧帝大の先生も多いなか、明治大学の別府先生と並んで私学の事例報告は二つのうちの一つとなります。お聞きいただければ幸いです。

事例報告2-1 立教大学

○豊田 ただいまご紹介いただきました立教大学の豊田と申します。私のほうから、立教大学におきます、立教大学の歴史に関する授業の事例報告をさ

せていただきたいと思います。レジュメをつくっておりますので、そちらをもとにしながら話を進めていきたいと思ひます。

まず、私自身なのですが、今ご紹介いただきましたように、立教学院の百二十五年史の編纂を大学院の時代から、ひよんなことからかわるようになりまして、こちらの立教大学の歴史というのものにも関係するようになりました。ただ、もともと専門は日本の近現代史でございまして、普段は特に戦争にかかわる問題などを研究している立場でございまして。

今現在、立教大学において立教大学の歴史にかかわる科目というのは、レジュメの最初に書いておきましたが、「立教大学の歴史」というのものが一つと、もう一つが「立教学院と戦争」という、二つの科目が展開されております。

「立教大学の歴史」のほうは、全学共通カリキュラムの総合A群、いろいろと皆さんのお手元に資料があるかと思ひますが、そのうちの「立教科目」という資料で示されている「大学」というテーマ、そのなかの一つの科目として、この「立教大学の歴史」が設置されております。この科目の担当を、私が今現在しているという関係で、今回、事例報告をさせていただきますことになったわけです。

一方、「立教学院と戦争」につきましては、こちらの「立教科目」ということではないのですが、全学共通カリキュラムの総合B群ということで、こちらは複数の教員で担当するというかたちで、特に戦時下にテーマを絞って授業を展開しているという特徴のものです。

今日は特に「立教大学の歴史」のほうを中心に事例報告をさせていただきます。2005年度に行われましたシンポジウム。前の立教学院史資料センター長であります老川慶喜から、前は報

告があったわけなのですが、こちらの前回の記録につきましては、これまたお手元の白い冊子のほうです。『大学教育研究フォーラム 11』に収録されておりますので、またお時間のあるときにも読んでいただければと思います。

このなかでも書かれているのですが、前回の老川報告で三つほど課題が挙げられておりました。一つは、今現在こちら、池袋キャンパスになりますが、もう一つ、新座のキャンパスがございまして、この新座キャンパスにおきましては、自校の歴史に関する教育が展開されておられませんので、その開講ということが一つ課題だろうという話が上がっております。二つ目としましては、授業担当者の職位の問題です。あとでもう少し詳しくお話をいたしますが、2005年の段階での科目の担当者というのは、立教院史資料センターで研究業務にあたっております学術調査員という肩書きの者でしたが、こちらは任期が最大で5年ということですので、やはり担当者の不安定さということが指摘されております。三点目としましては、そうした科目を担当しております立教院史資料センターと授業の一体化ということが課題であろうと指摘されております。すなわち、大学アーカイブスの基本的な仕事としまして、資料の収集や研究、展示、教育などがありますが、なかでも特に立教の場合には、常設の展示を持っていないということも、一つの課題だということも示しておりました。

こうした前回の老川報告における三つの課題というものも念頭に置きながら、その後の立教大学における実践内容と、今現在抱えている課題がどのへんにあるのかというところでお話をさせていただければと思います。

まず、この自校の歴史に関する授業の展開の過程ということなのですが、

レジュメのあとに資料1というものが付いています。こちらが、立教院史資料センターがこの立教大学の歴史にかかわる科目に関与するようになってからの展開の経過になっております。

立教大学におきましては、寺崎先生が1997年度から、この大学の歴史にかかわるような講義の試みをなされて、その後、2名ほど担当者が間に入っていたようですが、2002年度から立教院史資料センターがこの「立教大学の歴史」を担当するかたちになっています。このとき私が初めて「立教大学の歴史」を担当させていただきました。

翌年2003年度からは、先ほど言いました、複数の教員によります「立教院と戦争」という科目も展開していくことになります。

この2002年度当時、学術調査員、私もその職位にあったわけですが、3名おりまして、毎年持ち回りのようなかたちで、その後授業を展開していくことになります。ですので、私自身は日本近現代史における立教大学というようなことをテーマに掲げて授業をするわけなのですが、一方で2003年度、大島という学術調査員がいたのですが、彼の専門分野は教育史ということでありましたので、教育史における立教大学ということを前面に押し出した展開。一方、2004年度になりますと、大江という学術調査員が担当しまして、こちらは専門分野がキリスト教史ということもありますので、近代のキリスト教史における立教大学という点から授業を展開していった。ですので、担当者によって、毎年若干、その方向性が違うというかたちで推移をしてきておりました。

ただし、近年、これまで授業を担当してきた3人の学術調査員の任期が切れまして、2007年度から、学術調査員の任期が切れたあと、私は文学部に所

属するようになったわけですが、人によっては学外に出られたということもありまして、今現在、私が文学部に籍を置きつつ、「立教大学の歴史」を担当するというかたちになっています。

また、こちらの資料1を見ていただきますとわかりますように、2007年度と2008年度におきましては、老川報告で課題とされました新座キャンパスにおける授業が開講されております。こちらのほうも私が担当しておりますので、昨年度から池袋と新座の二つのキャンパスでまったく同じ授業を開講しているというようなかたちになっています。

2005年度以降の到達点を授業内容上で見ていきますと、やはり一番大きかったのは、テキストとしての小冊子をつくったということではないかと思えます。こちらもお手元に資料がいつているかと思えますが、こちらの紺の『立教大学の歴史』という冊子になります。こちらもお時間のあるときに、「はじめに」などを読んでいただきますと、これまでの立教における取り組みなどが紹介されておりますので、ご参考になるかと思えます。

今まで、その3名によって持ち回りで授業をしてきたということがありまして、私としても、私が行ったことに加えて、他の担当者が一体どのようなことを授業で話しているかということも気になりまして、3名の担当がひととおり終わっているということもありますので、それを機会に一冊の本にまとめてみようではないかというかたちで、このテキストの作成が始まりました。

そもそも授業を担当しております、どのような授業内容が適切なのかということは、やはりいつも悩みながらしていたということがあります。そう申しますのも、立教学院の公的な年史では、『百二十五年史』というものが1999

年度で完結したものが最新のものなのですが、残念ながらそのなかでは、通史が刊行されなかったという経緯がございます。ですので、最新の通史ということになりますと、1974年に出された『立教学院百年史』というものに依拠せざるを得ない状況がありました。ですので、その『百年史』だけではやはりなかなか難しいところがあるので、『百二十五年史』で発掘された資料などを使って、どういう構成があり得のだろうかということ、3名でもって試行錯誤してきましたので、やはり簡便な通史も兼ねたテキストがどうしても必要であったということがあります。やはりこれが出されたということが、一つの到達点ではないかと思えます。

今現在は、このテキストを使ったかたちで授業を行っているわけですが、具体的にどういう授業内容かと申しますと、資料2のところ、2008年度の授業の内容を付けておきました。初回のオリエンテーションを含めまして、ちょっと余裕を持たせて12回で構成してございます。これはあとで、先ほど紹介しました『立教大学の歴史』という冊子と比べていただけるとわかるのですが、ほとんど『立教大学の歴史』に準拠したかたちで毎回のテーマは設定しています。

ですので、これまでの3人による試みの集大成というものを遺産として、今現在は授業をしているというかたちになっています。

このテーマの立て方からお気づきになる方がいらっしゃるかと思えますが、やはり構成上、非常に大きく偏っているところがございます。特に戦時下の部分ですね。例えば、7、8、9と3回ほど押さえております。また、10回目のところも、戦争の結果がどうなったのかという部分。ですから、戦後の部分も入れますと、戦争絡みのテーマを

4回設定している構成になっておりまして、その一方で、あまり戦後の話は、11回と12回目という、期間としては長いのですが、取り上げる回数は2回しかないという偏りが出ております。

なおかつ、授業で扱う主なポイントとしましては、やはり大学を含めました立教学院全体、そうした機関としての歩みがどうであったのかということを中心に基本的な部分にしておりますので、細かい部分である当時の学生の動向とか、そのへんはなかなか授業のなかではフォローしきれていないという状況でもあります。やはりどうしても授業で話すのには、根拠をもって話をしたいというところがございますので、なかなか研究が進んでいないところには踏み込みづらいところがあります。私自身、歴史を専門としている関係もありますので、授業自体のスタンスも、このシンポジウムの課題でもあるかと思うのですが、あまりアイデンティティーの形成とか、そういうことを私自身は考えないで授業をしています。むしろ立教大学という非常に身近な素材を使って、歴史というものを考えてもらう。そのことを、私自身としては目標としております。

大学にとっては、過去の歴史を振り返りますといろいろと、特に戦時下などは具合の悪い部分もございますが、そういった部分も包み隠さず、できるだけ資料をもとに扱うようにしております。ですので、先ほどの報告ですと、京大の西山先生のスタイルのような授業を展開しているのではないかと思います。

授業においては、やはりレジュメでありますとか、資料をできるだけ配布しております。テキストのほうにも可能な限り、資料の引用をしておりますので、授業のなかでそうした資料を実際に学生と一緒に読むことによって、

そこからいろいろともの考えてもらえればと。そういうところにポイントを置いた授業になっているのではないかと思います。

あとは、授業上の工夫としましては、当時の写真資料をできるだけ多用しまして、スクリーンにできるだけ多くの写真を出して、見てもらうことによって、そうした時代の肌触りと言いましょいか、当時の立教の様子を視覚的に訴えていくことに気を遣ってはおります。

さらに、毎回の授業が終わってから、これもあまり大きな紙ではありませんが、コメントシートに必ず記入してもらって、授業のなかで考えたことや、その授業自体への感想。質問は絶対に書かないようにしてくださいと。疑問に思ったことは、自分でできるだけ解決するよにということ、あくまでも感想でありますとか、そういった方面の記入をお願いして、こんなスタイルで授業を行っております。

こういう授業が学生にどのように受け止められているのかということ把握するのはなかなか難しいところがあるのですが、比較的毎回のコメントシートでありますとか、最後の授業のときには、講義全体に関する感想なども書いてもらっているのですが、おおむね評価はいいのではないかと。批判的な反応は驚くぐらい少ないというのが、担当者としての実感であります。

これは、そのうちのほんの一例であります。資料の後ろのほうに、『大学教育研究フォーラム13号』のなかで、この「立教大学の歴史」を紹介したときの記事を付けておきました。『大学教育研究フォーラム13号』のほうは別途、冊子でもお配りされているかと思いますが、こちらの37ページのところですね。「学生の反応」というところがあるかと思えます。こちらは昨年度のコメントシートから特徴的なものを抜粋

したものになります。この学生の反応のなかで、全体的な傾向として読み取れるのは、この「立教大学の歴史」を聞いたことで、非常に素直に、素朴に、「いろいろなことを発見した」、「驚いた」という反応が大部分を占めております。

ただし、私自身はあまり学校への愛着ですとか、誇りということを前面に押し出して授業をしているわけではないのですが、こうした素朴な発見や驚きということが、こちらが意図していないわけですが、結果的には自分の大学に愛着を持ったとか、誇りを持ったとか、自分自身の学生生活はこれでいいのかなとか、そういったことの見直しにもどうやらつながっているというのが、反応としてはあらわれていて、私自身は結構びっくりしているところがございます。

あまり例は多くはないのですが、そうしたなかでも、よりこちらの担当者の意図を超えたかたちで多くのものをくみ取ってくれているケースも見られております。こちら、「学生の反応」のところ、右側に三つほど挙げておきました。あまり大学とは何かとか、学ぶとは何なのかということを上大段に構えて講義をしているわけではないのですが、歴史を見つめる、そしてさらに、身近な例である自分の所属している大学の歴史を見つめるということが、そもそも大学とは何なのか、そこで学ぶとはどういうことなのかということ、自分なりに積極的に受け止めて考えてくれている。こういう学生さんの反応なども見ると、やはりこうした自分の大学の歴史というものをあらためて講義することの意味と言いましょいか、可能性と言いましょいか、そういったものをこちらが意図していなかった分だけ驚かされたというところがございます。

こうした試みを経てきまして、では

今現在、どういう到達点にあって、そして今後、どのような課題があるのかという最後のお話をさせていただきます。

まず、教科書ができたことによって、授業内容のある一定程度の水準というものが確保されたということが、やはり大きな到達点だと言えるかと思えます。ただし、授業でどのような構成にするのかというのは、最初のころは毎年悩んでいただいぶ組み替えをしながらつくっていったわけなのですが、ひとたびこういうテキストができますと、昨年、今年度と、基本的にはこのテキストに依拠して授業を組み立てておりますので、あまり悩まなくていい分、授業内容としては固定化してしまうのかなということは、自分自身で反省しなければいけないなど。やはりこうした組み上げたものに、これからさらにどういうものを付け加えていくのかということ、もっと積極的に行っていかなければということは、逆に課題として考えているところでもあります。

やはり新しい内容を組み込むということになりますと、それだけ立教大学、さらには立教学院全体の歴史研究ということが進んでいないといけないということがあります。先ほど、複数の教員で行う総合B群の戦時下に特化した授業について触れましたが、まさにあのような授業が展開できているのも、立教大学のアーカイブス機関であります立教学院史資料センターがその設置の当初から戦争に関するプロジェクトに取り組んできたということが、非常に大きく影響しております。学内外の、こうした戦時下に関する研究に興味を持っていらっしゃる方に、資料センターの研究員になっていただきまして、ある意味、これまで総力を挙げて取り組んできたということがあります。そのために、立教学院の歴史

のなかでも戦時下にウエイトが置かれているというのは、やはり最新の研究成果が戦時下に偏っているということもあるわけです。こうした研究成果を反映させて授業を新しく組み上げていく。これまでの到達点でもあり、今後においてもさらなる課題ではないかなと思います。

ですので、なかなか戦後の問題の回数を増やすことはちょっと難しいなと思っているのは、立教におきましては、ほとんど戦後の研究が基本的にきちんとなされていないのではないかと私自身が感じているところがあるので、なかなか取り上げづらいなと。ただし、大学紛争の話などは、学内でもだいたい資料は残っておりますので、これは自分なりにいろいろな資料を多く提示することによって、その価値判断を示すよりも、むしろそういったものから当時の大学の動きというものを、皆さんがどのように考えるのかということを示しますと、やはり非常にこの大学紛争に関しては反響が大きいということを感じております。ですので、研究がなかなかきちんとして進んでいないとはいっても、やはりテーマによっては挑んで学生の前に提示していくことも必要になってくるのかなということも、課題の一つとして考えております。

もう一つ、先ほどお話ししましたように、池袋だけではなくて、新座キャンパスで授業を展開する。これが一つ課題をクリアできたことなのですが、いざ2007年、そして今年度とやってみて思っていることは、先ほどの資料1のなかでも受講生の数を示しておいたのですが、絶対数の違いもあるのですが、思ったほど受講生の数も多くないということ。さらに、授業で話しているときも、学生の反応が今ひとつ、池袋の学生とは違うのではないのかな、ピンとこないのではないのかなという

ことを肌で感じております。一番最初の回に、これはあまり厳密なものではないのですが、入学の動機や受講の動機、自分自身が今現在持っている大学へのイメージはどのへんにありますかということ、アンケートで調査しています。これはフリーで記述してもらっているので、厳密なデータにはならないのですが、非常に率直なところが出ているのではないかなと思います。

例えば、池袋でありますと、確かに受験戦争の結果がここに招いたというような、不本意ながら来たという例もあります。割合に、身内に立教の出身がいて昔からなんとなく立教が好きだったから来ましたと。あとは、やはり池袋のキャンパスはとてもきれいだから立教を志望しましたと。ですので、立教というもののそのものへの関心でありますとか、愛着とか、そういうものを抱きながら大学に入ってくる。なおかつ、そういうような基盤がありますので、その「立教大学の歴史」というのは何だろうかという関心を持って来ましたという人も割合多いですね。

ただし、近年開校されました新座キャンパスの場合は、あまり立教に来たくて立教に入ったという人が多くないですね。新座には非常にユニークな学部が設置されている関係がありますので、むしろそうした学部でありますとか、そこで展開されている専門分野に関心を持って来ましたと。では、なぜこの授業を受講したのかと聞いたら、「カリキュラムの都合上」ということが結構多くございます。そのために、授業内容を新しく、新座の学生向けのものが必要になってくるのかなということを感じております。池袋の場合ですと、キャンパスの変遷がどのようになったのかということ、地図などいろいろなものを示しながら見せると、自分たちが何気なく通っているキャンパスに

もこんな歴史があるのかということ、割合に食いつきがいいわけなのですが、新座の学生に池袋のキャンパスの変遷を試してみたところでも、やはりなかなかピンとこないところがあるのです。ですので、新座用のカリキュラムはどのようにしたものかなと。新座キャンパスの場合ですと、本格利用が1998年ということになりますので、そこからの歴史ということでは、なかなか難しいところがありますので、学内でどなたかアドバイスいただけたらということなどを考えております。

そして、最後に、これは主に到達点というより課題なのですが、やはり立教の場合は、担当者の不安定さということが大学の歴史を展開していくうえで非常に不安な部分ではないのかなと感じております。先ほどから言っておりますように、当初は学術調査員という任期制の研究職、そして今現在は私、文学部にも籍を置いておりますが、私自身にも任期がございますので、これが切れたあとというのは、授業の担当がどのようになっていくのかというのは、私自身もよくわからないということでもあります。ですので、2005年の老川報告のなかでありました課題の二つ目というのは、実はいまだに解決されていないと考えています。

そして、こうした授業を展開していくうえで、やはり一番その資源として重要なのが大学アーカイブスの活動だと考えております。課題の三つ目の常設の展示というのも、今現在、実施できていないという状況でもございます。

ですので、こうした自校史の科目というのは、やはり単なるひとコマの授業ではないのだろうと担当者としては考えております。その背後にあります大学アーカイブスの活動、こういうものと非常に密接に関係しているものがありますので、より充実した科目を開

開していくということになりますと、やはりそうしたアーカイブスセクションというものに対する大学全体の理解、バックアップといったものが、教育自体の質をも向上させていくのではないのかなと考えております。以上です。

○司会 立教の事例報告についてお聞きいただきました。また後ほどご質問などいただければと思います。

次に、名古屋大学文書資料室の山口拓史先生にお話をいただきたいと思っております。名古屋大学は、旧制帝大のなかで唯一、市の名前が大学についた大学でありまして、設立には地元との密接な関係や経緯があるとお聞きしております。先ほどよりお手元に回覧させていただいております、全12冊の『名大史ブックレット』に詳しい記述がございます。またこのブックレットの出版は、通史に偏らず、マンネリに陥らないという授業展開の成功の理由の一つであるとお聞きしております。名古屋大学での自校史教育は1999年からとお聞きしておりますが、それに先行して数年間、3年間ほど初任職員研修でも自校史教育を実践されたという経験もありだと伺っております。専門と教養のどちらかに属するという歴史教育、自校史教育だけではなくて、ガイダンス的な意味の自校教育というところについてもご意見を頂戴できればと思います。よろしく願いいたします。

事例報告 2-2 名古屋大学

○山口 名古屋大学の山口でございます。本日はこのような場にお招きいただきまして、ありがとうございます。限られた時間ではございますが、名古屋大学における自校史教育について、さっそく報告を行いたいと思っております。

なお、私の報告のなかで、中部地区

における慣用表現として、名古屋大学のことを「めいだい」と呼びます。こちらでは明治大学がそうなりますが、私の報告のなかでの「めいだい」は名古屋大学であると置き換えていただきたいと思っております。

それともう一点、名古屋大学の自校史教育について、実は今年度、2008年度は事情がありまして、この「名大の歴史をたどる」という授業は休講しております。来年度から再開ということになりますので、今日ご報告させていただきますのは、昨年度、2007年度を最新としたものとして資料を組み立てて報告させていただきます。あらかじめお断りしておきます。

さて、本日はお手元にうぐいす色の封筒をご用意させていただきました。封筒の中にはレジュメ1枚のほか、配付資料が1から7まで、かなり物量作戦的などころがありますが、入れておりますので、適宜ご活用いただければと思います。

また、先ほどからご案内いただいておりますように、回覧用に『名大史ブックレット』と数種類の冊子を回しております。これも適宜ご覧いただければと思っております。

では、お手元のレジュメに従いまして、報告を進めさせていただきますと思います。

はじめに、私の所属する大学文書資料室についてひと言述べます。その概要は、配付資料1をご覧くださいとして、私ども大学文書資料室は、名古屋大学創立50周年を記念して編集されました『名古屋大学五十年史』の刊行を終えた1995年度の翌年度、すなわち1996年度に設置されました名古屋大学史資料室といった施設の流れを受けた組織となっております。英語の表記では、Nagoya University Archivesと表記しておりますように、いわゆる大学アー

カイブ組織であります。この間の主な活動につきましては、資料1の3ページあたりのところを見ていただきますと、列挙してございます。後ほどでもご覧いただきたいと思います。

今日のテーマでございますが、自校史教育についてということで、まず「はじめに」の(2)のところに入らせていただきます。名古屋大学では、本日のテーマである自校史教育の取り組みを1999年度から始めまして、試行錯誤を重ねております。配付資料2として、今から6年ほど前にまとめた研究ノートの抜き刷りをご用意いたしました。以下、それに基づいていくつかのポイントだけを述べさせていただきますと思います。

名古屋大学における自校史教育実施の背景には、四つの要因がございました。1点目は、大学アーカイブスが設置されたということ。2点目は、私立大学を中心にいくつかの自校史教育、あるいは自校教育の先行事例が存在していたということになります。3点目が、学内の教員から、自校史教育を開講してはどうかという提言を受けたということがございます。そして4点目として、学内に初任職員研修プログラムがございますが、そのなかに自校史講義が組み込まれた。以上が、名古屋大学における自校史教育のきっかけになった要因であると考えております。

こうした背景をもって開始された名古屋大学の自校史教育は、レジュメ1(2)



の部分に掲げてありますような3項目の変遷を経て今日に至っております。まず、1項目として「日本の大学—近代日本と名古屋大学—」と書いてあります。これは、配付資料2のちょうど100ページに一覧表があると思います。そこを見ていただくとわかりますが、名古屋大学で初めて開講した自校史教育ということになります。同じ一覧表に、各回の講義主題がございます。それをご覧いただくと、第1回以降の中身を見ていただければ、たしかに自校史教育であるということをご理解いただけると思います。先ほど申しましたように、講義名としては、「日本の大学—近代日本と名古屋大学—」という名称であり、この講義名だけを見て考えますと、今の「名大の歴史をたどる」という自校史教育の名前と比較して、少なからず肩に力が入った表現のようにも思われてなりません。

これは、自校史教育のような新しい概念の講義が、当時の名古屋大学における全学教育科目の制度の枠組みにはうまく収まることができなかったということが原因であります。こうした固い表現の講義でなければ、開講そのものが認められなかったという事情も影響していました。当時、私自身も「みずからの大学の歴史を教えることで、それを大学の講義として単位を与えるのはいかがなものか」といったご意見を学内の教員の方からいただいたこともございました。結果的には、今日のように名大の歴史として一定の認知を得ることにはなりました。名古屋大学における全学教育の変遷そのものにつきましては、配付資料3を用意しました。この間、平成5年、平成14年、平成15年以降、こういった大きな三つの節目のなかで自校史教育が変遷してきた。そのような位置づけでご理解をいただければと思っております。

さて、レジュメの第2項目に移りたいと思います。そこに掲げてあります「日本の社会と歴史」という講義名称がございますが、これにつきましても、事情は第1項目、「日本の大学—近代日本と名古屋大学—」と同じような事情がございます。講義の名称がこのような形になっています。しかしながら、自校史教育とは連想され難いこういった講義名称で開講した2002年度には、私ども資料室としてそれなりの狙いもございました。先ほどの配付資料2の一覧表の部分で、「区分」と書かれた部分がございます。そこをご覧いただきますと、2002年度の部分につきましては、それまで「主題科目・総合科目」という位置づけになっていたものが、2002年度からは、「主題科目・基本主題科目」というグループに変化しております。この部分は、少し複雑なため説明が必要かもしれませんが、結論だけを述べます。こういった「主題科目・総合科目」から「主題科目・基本主題科目」へと変化させることは、受講学生の学年に変化をもたらします。つまり、2002年度からは1年生をも対象にできる、いわゆる初年次教育を可能にするため、この「主題科目・基本主題科目」というグループを使って自校史教育を継続したという事情がございます。

さて、「はじめに」の最後になりますが、第3項目である「大人数対象」科目化について述べます。現在における名古屋大学の全学教育科目の枠組みは、配付資料3にありますように、2003年度に導入されたものとなっています。そして、現在の自校史教育である「名大の歴史をたどる」という講義名称も、この2003年度に改めました。この単純かつ明快なタイトルは、自由な講義名称を使うことができるようになった全学教養科目という枠組みのなかで実現

したものとなっております。

こうした講義名称の変化は、受講者数に一定の変化をもたらしております。これまで触れませんでした。自校史教育の開講後から2002年度までの受講者数は、およそ12名から33名の範囲にとどまっておりました。自校史教育を行っていると言いつつも、半期において、たかだか20名前後の学生が受講していたにとどまっていたということになります。

これに対して、名称を変更いたしました2003年度は77名、2004年度は95名、2005年度は78名という変化が現れました。この受講者数に対する評価はさまざまだと思いますが、名古屋大学の場合、全学教養科目は定員80名というルールが設けられております。これによって、2003年度からの数年間は、初回講義の開講日、定員からはずれた受講希望生が教室前の廊下に多数あふれるという状況が、この「名大の歴史をたどる」という授業で起こっております。これは、80名以上とすることは認められないというシステムの問題、ルールの問題から生じたものです。

ただ、このルールにつきましては、2006年度から特例が設けられるようになりました。三つの全学教育科目、三つのうちの一つが私どもの「名大の歴史をたどる」。もう一つが、「大学でどう学ぶか」という全学教育科目。最後の一つが、2年生を対象としたものですが、「キャリア形成論」。これら三つの全学教育科目につきましては、大人数対象の科目という特例を設けていただきまして、定員枠が200名に増やされました。その結果、2006年度が250名、50名定員を超えておりますが、これはちょっと黙認いただいたということとして、2007年度は233名となっております。これは2006年度に250名もの受講を認めてしまったこともあって

チェックがかなり厳しくなりましたが、それでも結果的には233名の受講者を得たというようになっております。これが自校史教育「名大の歴史をたどる」の変遷の概要ということになります。

続きまして、レジュメ「2」にあるカリキュラム関係の部分、実際にどのような授業を行っているかという点に触れたいと思います。お手元には、資料4として、2003年度以降の講義一覧をご用意いたしました。これをご覧いただくと、「名大の歴史をたどる」が総説編と各説編の2本立てで実施されていることをご理解いただけたと思います。この点につきましては、回覧中の『コースパケット（教材集）』という緑色の冊子をございしましたが、そこでも説明してあります。「総説編」という部分では、日本の高等教育史を制度変遷の面から時系列的に取り上げるなかで、名古屋大学の歴史で概括的に講義をすることを目的としております。一方、「各説編」におきましては、特定のテーマを設定することによって、総説編における通史的な観点とは異なる観点から、名古屋大学の歴史を見つめ直すとともに今後の展望を考察することを目的としております。

なお、配付資料4では十分に理解いただけないかもしれませんが、総説編における教材につきましては、基本的かつ共通的な教材を取めた『コースパケット』のほかに、各担当者が個別に作成するレジュメや資料などが利用されております。一方、各説編におきましては、教材は、これも回覧をさせていただいておりますが、『名大史ブックレット』が主な教材として利用されています。この『ブックレット』につきましては、のちほど改めて述べることにいたします。

ここで再びレジュメに戻っていただきたいと思っております。2(1)の第3項目

として、「総長講義」という文字がございます。自校史教育における総長講義につきましても、すでに九州大学のすぐれた事例がございまして、名古屋大学では国立大学法人化の初年度にあたる2004年度を機会に、「名古屋大学の法人化と展開」というテーマで、総長みずからが受講生に直接語りかける場を提供することにいたしました。名古屋大学では初めてとなる総長講義は、幸いなことにテレビ、新聞で報道されたこともあって、当日聴講できなかった学生などからも問い合わせを受けるようになりました。そこで、より広く多くの方々に活用いただけるように記録冊子を作成した経緯がございます。本日は、その記録冊子も回覧として用意させていただいております。なお、この総長講義は配付資料4をご覧くださいとわかりますように、2005年度以降も総説編の最後の部分、あるいは各説編のなかで実施されております。この移動は、総長のスケジュールの調整の関係で、総説編に収まる場合と、各説編に流れ込む場合といった事情によるものです。各年度の総長講義の内容は、現在DVDに収録されて、附属図書館の視聴覚ライブラリに登録されております。これがカリキュラムの主なところになります。

続きまして、レジュメの2(2)「オリジナル教材」と書いた部分に移ります。最初に、『名大史ブックレット』についてです。このブックレットにつきましては、こちらの立教大学におかれましても2007年度から、内容は申し上げるまでもなく、デザイン性にも優れた非常に立派な『立教ブックレット』を学校法人立教学院として刊行されております。私も拝見いたしまして、その素晴らしさに大変驚いております。一方、私どもが作成しましたブックレットシリーズは、2000年12月に刊行を始め

ました。多分に手作り教材的な特徴をもつ冊子となっております。この『名大史ブックレット』刊行の第一の狙いは、自校史教育向けの簡便な教材を提供することにはありましたが、同時に、名古屋大学の教職員や多くの関係者、さらには高校生や一般市民の方々にも、とにかく名大史に関心を持ってもらおうという強い思いがあって作成に着手したのもあります。幸いなことにも、この『名大史ブックレット』は多くの読者を得ておりまして、現在までには12巻、今年度末には13巻を刊行する予定ですが、既刊分のなかには2刷、3刷を行っているものもございます。本日は回覧用としてご用意させていただいております。

また、2005年8月には、学内の総長裁量経費を受けまして、インターネットのウェブページ上でデジタルブック版の『名大史ブックレット』の公開も行っております。これによって、大学に来ていただかなくても、居ながらにして同じブックレットの中身を見ていただいたり、データをダウンロードしていただいたりできるようになっております。

次に、オリジナル教材としての『コースパケット』について簡単に述べます。これは聞き慣れない言葉かもしれませんが。私も当初、何のことかよくわからなかったのですが、名古屋大学の高等教育研究センターから、教材集としての『コースパケット』を作成してみないかとの提案を受けたことがきっかけで作成するようになりました。

この『コースパケット』は、見ていただいてもわかりますように、紛れもなく手作り教材集でありまして、内容的にも既存の刊行物等から転載したものが非常に多く、著作権保護の観点からも受講生以外には配布しておりません。授業内でのごく限られた利用というこ

とで、『コースパッケージ』を必要部数のみ作成して配布するという形式にしております。

それから、オリジナル教材の最後にある「短編ムービー」についても触れたいと思います。「名大の歴史をたどる」では、5年ほど前から1話10分程度の短編ムービーを数本上映することにしております。いずれも大学文書資料室が企画して専門業者に制作依頼したものです。名古屋大学の歴史的な特徴の一つとして、キャンパスの変遷ということがございまして、それを取り上げた動画が2話。それから、同じく名古屋大学のシンボルの一つとされております豊田講堂を取り上げた動画3話がございます。これら動画に対する受講生の反応はととても良好でして、特にキャンパスの変遷を取り上げた動画を、初回の授業オリエンテーションで見せたのち、一連の講義を終えた最終回にもう一度同じ動画を見せると、そのときの受講生の反応には非常に興味深いものがありました。それについては、配付資料のなかに「感想文」というところがございます。

私の報告も、ちょうどその「受講生の反応」というところにたどり着きましたので、レジュメ3「受講生の反応」に移ります。この項目につきましては、論より証拠ということでもありますので、配付資料の5と6をご覧ください。資料5につきましては、2007年度、「名大の歴史をたどる」の受講生による授業評価アンケートの集計結果となっております。各設問の内容は、全学の教養科目全体で共通に設定された項目となっておりますので、私どもの資料室が独自に設定したアンケート内容とはなっておりません。

一方、配付資料6ですが、これにつきましては、先ほどのご報告のなかに

もありましたが、名大においても毎回の授業終了時に受講生に提出を求めている感想文があり、その一部を示しました。本日お配りしたものは、2007年度「名大の歴史をたどる」の第1回のもので、最終回にあたります第15回の講義で提出されたものなかから抜き書きしたものとなっております。これからは、自校史教育を受ける前後の受講生の期待や感想、その変化を読み取ることができるのではないかと考えております。

さて、最後になりますが、以上の報告をもとに今後の課題などについて少し述べたいと思います。冒頭に述べましたように、名古屋大学では自校史教育を開講し始めてからちょうど10年になろうとしています。まさに試行錯誤の10年であったと考えておりますが、今回、この報告を行う機会をいただいたこともありまして、少し客観的に振り返ってみたいと思います。

その結果、レジュメに示しましたように、三つの点、「いくつかの制約」、「ひとつの確信」、「ひとつの応用」といった項目を立てました。順を追って申し上げたいと思っております。

まず第1項目、「いくつかの制約」について。少なくとも名古屋大学における自校史教育には、まだいくつかの制約が残されております。例えば、半期2単位の開講という時間的な制約がございます。さらに、先ほどのお話にもありましたが、担当教員の不足という制約もございます。いわゆる4年一貫教育が導入されまして、一方で大学教育の準備教育の必要性が高まっているなかで、大学カリキュラム全体が増大化している今日の現状があると思っておりますが、そういった現状において、自校史教育が含まれている全学教養科目の開講枠というものが相対的に狭くなっていると私は感じております。限られた

時間で授業を行うということは、学側にとっても教える側にとってもいろいろな制約を感じるものでございます。そうした時間的な制約というものは、例えばそれを単に通年の4単位にすればよいという問題ではなくて、限られた全学教育科目のなかに多くの講義が乱立、並立して開講されることで、結果的には学生に興味や関心のある数多くの講義の中から択一を迫っているという点が問題ではないかと感じております。

名古屋大学では、自校史教育を含む大人数対象科目がカリキュラムの都合上、同じ曜日の同じ時間帯に、先ほどの「大学でどう学ぶか」、「名大の歴史をたどる」が設定されています。まさにこの問題は、裏番組として見たい授業もある、受けたい講義もあるという状況の中で、学生に選択を強いる形をなしております。全学教育の枠ではありませんながらも、その全学教育を受けられないという問題性が浮き彫りになってきていると思っております。一方、自校史教育を初年次教育と位置づけて実施するという観点から見ますと、担当教員の不足というものも大きな制約となっております。先ほど述べました時間的な制約のなかで、全学部を対象とするような自校史教育を展開するためには、当然のことながら担当教員の確保が必要になってまいります。他大学でも導入されているようですが、学内の協力教員の体制を活用するということも選択肢の一つだと思います。ただし、その場合、結局は各説編の担当者ばかりが補強される結果を招くのではないかという可能性も否定できないと私は思っております。

以上、「いくつかの制約」について述べましたが、その一方で、私は自校史教育について「ひとつの確信」を持っております。2005年12月にこのキャ

ンパスで開催されましたシンポジウム、「自校史教育の意義とその可能性を探る」の筆録を拝見いたしました。その際に指定討論者であった西山先生が定義された自校史教育の教養教育としての機能。さらには、当日の司会を担当されました寺崎先生が、シンポジウムを振り返るなかで、自校史教育は歴史学習を通じての教養教育という性格を持つと整理されておりますが、これらのご指摘は、まさに名古屋大学の歴史をたどる自校史教育にも当てはまるものだと今さらながら考えております。

自校史教育の到達点というテーマから少しはずれるかもしれませんが、私は大学アーカイブスの機能、あるいは大学アーカイブスの活動と言ってもいいと思いますが、そうしたものが自校史教育を含むさまざまな取り組みを支えていると考えております。

このアーカイブスの活動について、私が経験的に感じたことがあります。それは、アーカイブスの活動というものは、どうやら非接触的な方法ではなかなか伝播しない、普及しないようなものでありますが、その一方で直接的に接触した方々には見事にその活動は伝播していくと感じております。本務校において日々仕事をしておりますと、年齢や性別に関係なく、資料室に来室されたり、私どもの刊行物に触れたりされた方は、そのほとんどが名大史に関心を示されて、アーカイブスの活動にも目を向けていただき、その活動を理解していただくことができます。これは、自校史教育だけに限られたことだけではないと思っておりますが、とりわけ自校史教育を通じたアーカイブスの活動の伝播というものは、私にとって「ひとつの確信」となっております。

最後に、「ひとつの応用」について述べてこの報告を終わりたいと思っております。名古屋大学における自校史教育の実施

背景の一つに、初任研修における自校史教育が組み込まれたことがあると冒頭に述べました。その後、その初任研修における自校史教育のプログラムは、そのプログラムの変更に伴って、実は数年間、途絶えておりました。ところが、2007年度から、再び新規採用職員研修における自校史講義が再開されております。配付資料7に、同研修で自校史講義を受けた方々、新任の職員の方々の感想文の一部を示しておきました。ここには、自校史教育の一つの応用の可能性が見えるような気がしております。今後もこの可能性を探っていきたいと考えております。

以上、限られた時間の報告ではございましたが、ご清聴いただき、ありがとうございました。

○司会 山口先生、どうもありがとうございました。

次に、東北大学の高等教育開発推進センターの羽田貴史先生よりお話をいただきしたいと思います。羽田先生は、戦後大学改革、大学教育論、教員養成論のご専門でいらっしゃいます。東北大学で百年史の編纂、自校史教育を担当なされております。東北大学には常設の資料館での展示も行っています。東北大学に赴任される前は、広島大学で『広島大学五十年史』の編纂に携わられて、そこでの自校史教育の経験もお持ちです。さらに、広島大学では附属高校の高校生を対象の自校史教育も展開されたともお聞きしております。お一人の登壇者ですが、数校分の代表の登壇者分のお話をいただくと伺っておりますので、よろしく願いいたします。

事例報告2-3 広島大学・東北大学

○羽田 山田先生は、最初に自校史教育は怪しげだとおっしゃいましたが、私の経験してきた自校史教育は怪しげなだけではなくて、不純なものでございます。不純ですがまじめであると申し上げておきたいと思えます。

【自校史教育の課題と広島大学史】

まじめにとりくんできた証拠に3つの問題を提示します。第1に、自校史教育は、私の経験では、やっぱりドラマがないと書けない、伝えられない。どうドラマをつくるのか、えぐり出すのか。第2に、研究者や同業者ではなくて、学生に対してどのような自校史が意味を持つのか。第3に、東北大学の場合、帝国大学でございますので、一体、帝国大学の戦後史はどのようなのか。これは非常に難しいというのは私の経験でございます。

広島大学で最後に50年史の編集委員長をさせられて四苦八苦したのですが、1998年に編集委員会が発足しまして、助手1名と教務補佐員1名と事務補佐員1名のポストをもらいましたが、このときに編集委員会で考えたことは、まず、この組織を残そうということなのです。年史編纂が終わってもなくならない組織をつくりたい。なぜかという、広島大学はかつて25年史をつくりましたが、私が80年代に調べに行ったら、25年史の資料は何もなくて、人もなくて、資料も集めてそのまま事務局に返してしまって、25年史関係のものはキャビネットに1個分しかなかったのです。このままだと50年史が終わってもそうなる。継続的に年史編纂をするためには、どういう方策が有効か。ここからすべてが始まるので、当然、不純な内容になるわけなのです。

発足してからすぐ、翌年の11月に50周年記念をするので、何か引き出物を

つくれという上部委員会からの命令がございました。なぜ11月かというのと、広島大学の開学記念日は11月2日になっています。国立大学の誕生日というのは格差がある。生まれでどの大学かわかるのですね。純粹の新制大学は5月31日が誕生日、国立学校設置法でできたからです。旧制帝国大学は戦前に勅令でもって決められた日になった。それ以前から大学であった東京大学は明治10年4月12日の東京大学創立記念日であり、北海道大学は札幌農学校の開校式の8月14日です。

4つ目が、いろいろな事情で5月31日に発足できなかったところです。広島大学の場合、学長が選ばれなかったのですね。それで、1年たってからようやく森戸学長が選ばれて、11月になって開学式を行った。この日が広島大学の開学日です。そのときは11月5日が開学記念日によかったと思いましたね。5月31日に出せと言われたら、とてもではないけれどできないので、学長が遅く選ばれたことをこのときほどうれしく思ったことはありません。

それで、そのときにわれわれがした最初がこれ（『広島大学の50年』）なのですが、とにかく作るときに、文章はすぐ書けないから写真集をつくらうと考えました。でも、写真集ではなくて、写真集プラス読み物にしようというので、こんなものを作りました。理由は2つあって、東大は100周年の時、すぐに『東京大学の百年』という写真集を館先生と寺崎



先生と一緒に作りましたが、実は広島大学は写真がそんなにないのですね。写真集になるほど写真がない。なので、今ある写真をなんとかごまかして使うためには文字を入れなければならない。もう一つは、やっぱり授業をしようと。教育をして存在意義を示して、組織を永続的に残そうと。そうすると、できたあとに授業で使えるもの。つまり、見開き1ページでコピーしたら、それで30分か40分授業ができるものを作ろうという不純な動機で、とりあえずこれを作りました。

【広島大学のアイデンティティー】

作り終わって、もちろんすぐに授業というわけにはいかないので、いろいろな議論をしながら、実際に始めたのは2001年だったか、2000年だったか。僕よりもむしろ一所懸命に授業した菅さんが、今大阪大学の年史編纂に転職しましたけれども、そのとき考えた構想は、広島大学の特色を生かそうということなのですね。それで、アイデンティティー論というのが先ほどから出てきていますが、広島大学に勤めてわかったことは、とてもアイデンティティーのある大学なのですね。教員の中にはあるのです。何がアイデンティティーかというのと、戦後、文理科大学で、戦後急速にできた駅弁大学ほどレベルは低くないという意識がある一方、帝国大学ではないという狭間のなかで、いかに帝国大学に近づくか、横並びで東京教育大学なり筑波大学を見ながら、大学を強くして行こうというアイデンティティーが教員全体で共有しているところですね。

ですから、僕も大学の管理運営にだいぶ関わりましたが、管理運営のときに参考としていろいろ配られる資料は、帝国大学が全部7つ並びます。その次に、筑波と広島と、その下に旧制医科大学を母体にした5大学ですね。

千葉、金沢、岡山、熊本、長崎が下にあるのです。そうした構図の中で、どのようにして組織を大きくしていこうかということに、考えてみれば40数年間、努力してきた大学なのです。私は出身大学も含めて4つの大学を経験していますし、大学調査も沢山しましたけれど、広島大学のマネジメントの能力はとて高いです。

しかも広島大学の特徴というのは、日本で一番たくさんの学校が合併してできた大学なのです。11のキャンパスに分かれています。種類は千葉大学のほうが上なのですが、集まった学校の数は国立では一番多いのです。その結果、森戸辰男が着任して最初にまとめた大学の指針は、1つの大学になることです。東京大学はこんなことを言う必要はないでしょう。初めから1つです。京都も言う必要はない。明治も言う必要はない。ばらばらだから1つの大学にしよう。アイデンティティーをみずから模索する歴史としても始まったわけですね。

そのときに出した森戸3原則というのがあって、中四国の総合大学、地域性のある大学、国際性のある大学にしようという目標を立てました。ですから、アイデンティティーが非常に見つけやすいというか、意識されてきた蓄積がある大学ということがよくわかります。

特に、なんといっても原爆被害ですね。これはもう、広島大学史のなかで一番詳しいのは原爆でどれだけ被害を受けたかというデータはしっかりして、いくつも記念誌が出ています。

もう1つは、統合の歴史でございます。11のキャンパスを一つにするためには、一つのキャンパスに住むべきだ。そのために、いったんは東千田にキャンパスを集中し、さらに数十年かけて西条地区に集めたという歴史をたどって

ます。

そして、1970年代には教養教育を中心に、総合科学部という枠組みができました。こういう特色を盛り込んで、広島大学はこういう大学だということを、これはあまり喧々囂々議論しないで、ほとんど1時間ぐらいで決まりました。

【大学史の読者は誰か】

それから、事実の視点も盛り込みたい。制度史にはしたくない。そうすると、教員と学生と学長、人間を入れたい。広島大学は、さっき言った森戸さんを含めてユニークな学長がいます。70年代の飯島学長は中興の祖で、そのあと名古屋大学の学長になって、臨教審の部会長になった。日本の傑出した大学人だと思います。学長の歴史は、広島大学史の授業のなかでも重視されています。

誰を読者にするかと考えたときに、僕らが最初に議論したのは、僕らがつくる大学史は誰が読むのかということです。まず、お互い大学史をつくっている人間だよ。同業者が一番先に読むだろう。研究者もひょっとしたら読む。次に読むのは、意外と庶務職員が読むのです。自分の大学でいつ何が起きたか。これだけで読まれるのは寂しいねと議論しました。少なくとも数年間、エネルギーを使うわけです。やっぱり学生に読んでほしい。そこも授業の、このへんはまじめなのです。不純なだけではありません。最初につくった講義一覧ですが、僕が最後で、広島大学とはどういう大学かという話をします。広島大学に移動してまだ4、5年だったので、なんとなく違和感があったのですが、行いました。

その後、2007年に東北大学に異動したので、最近の講義は担当していませんが、あまり構想は変わっていません。構想を考えていないという感じもありますが、一応これですとしてきてお

ります。

【講義の例】

時間がないので、僕が担当したところはこんなものだというものを、ぱっぱと30秒ぐらいでお見せします。統合の歴史ですが、世界的な統合のなかでどういう傾向にあるかという今の問題から入って、大学の統合というのはこういう枠組みがあるという類型を説明して、統合のパターンを提示して、戦後日本の統合の歴史を話します。これは寺崎先生の『大学教育』で書かれた統合の表がなかなかいいのです。作っていただいてありがとうございました。とても役に立ちました。広島大学の統合についてはこれ1枚だけです。これだけで30分お話をします。それと、今回覧しているものを使います。

受講者数ですけれども、2008年度は170何名で、僕はもういません。講義を担当しなくなったら学生が増えていると読むと寂しいものがありますけれども、一応、増えているということです。これは受講者の学年分類なのですが、1年生から開放しているのですけれども、1年生はあまり受けないのです。2年生が多いのです。東北大学も1年生中心でしたら、学生数が減ったのです。それで、初年次教育に本当にいいのかどうか、ちょっと議論をしたほうがいいような気がします。

成績分布です。圧倒的に「優」です。「不可」「放棄」も多いです。要するに、これは保険なのですね。大学の授業のなかには、一般教育、外国科目、保健体育科目とありますが、それ以外に保険科目という類型があります。学生が単位を取れなかった時のために、安全にかける科目、これを保険科目という、僕の造語なのですが。これを安全科目で取っているのも結構います。実際はほとんど「不可」はつけません。だから、単位を取れなかったのは授業、試験を

受けなかったとお考えください。しかし、だいたいまじめに聞いています。

授業成果の報告書は1年分しかございませんが、学生の授業評価によると、「難易度」は普通で、これはプラス評価で1以上がいいわけですけれども、「講義を聞いて広島大学の認識が変化した」は1以上で、学生がよく評価している。残念ながら、そのあとの授業評価のデータは、私はもう学内の人間ではないのでいただけないので、ちょっとこれしかないのですが、今はこれよりも少し上がっているのではないかと思います。

【高校生への出前授業】

広島大学の特徴は、僕がいなくなってから始めたのですけれども、附属の高校生に対して授業を行っているということです。出前講義として始めました。これは非常にユニークだと思います。担当者にインタビューに行ったのですが、附属の高校生も広島大学の一員なので、そういうことを自覚してほしいというのと、今勉強していることの意味を考えてほしいというキャリア教育的な位置づけと、あわよくばこの授業で広島大学への受験者を増やしたいという、やはり不純な動機があったということです。

広島県のなかで言うと、有名国立大学への進学力を持つのはもっぱら私学と附属高校です。県立高校ではほとんど東大に入らない。広島大学ぐらいがせいぜいです。それで、附属高校は附属高校でありながら広大に来ない。ぜひ取りたいというのもあったと思います。授業の事前調査と事後調査を行って効果を測定しています。これは論文にもなっておりますので、興味のある方はぜひご覧ください。

それで、結果は、簡単に言えば、あまり評判はよくなくて、広島大学への進学希望者が減ったのです。これはど

うでしょうか。僕の感じは、まずこれは強制教育なのですね。出前というのは、みんな集めて、無理やり聞きたくないのに広島大学の話をされる。このシチュエーションがまず非常によくはないのではないかと感じます。プラス、広島大学への意識を高めるのに、なぜ歴史をとというのも実はあると思うのですね。べつに歴史でなくてもいいのだと思います。大学とは何かとか、そういう授業でいいのに、歴史と無理に結びつけている。だから、たぶんアイデンティティーの問題でも、今日は自校史教育のアイデンティティーだけど、べつにそれは歴史である必要はないと私は思っています。違うアプローチがあるのではないか。ここもたぶん議論したらいいのではないか。

【東北大学の自校史教育】

一昨年、私は東北大学に移りました。東北大学でも、「歴史のなかの東北大学」という授業を始めました。今2年目です。きっかけは何かというと、私のポジションは、研究のために新設したので、特に授業はしなくてもいいポジションなのです。しかし、教育学研究科の協力教員として大学院で授業をしているのに、センターにいて自分のところで教養教育をしないのはちょっとまずいなと思って、何か授業をしようかなと思いました。これは不純ですね。僕は、するのだったら自校史教育だと思って、東北大学の歴史の授業をしようと思っていましたが、そのときに史料館があるので、史料館に一応、仁義を切ったほうがいいと思い、声をかけ、これは資料館のプレゼンスも高まりますし、ついては、リレー方式ですから、僕の分担3つか4つでどうですかと、このへんも不純なのですが、お互いに利害が一致したのですね。一致した証拠には、僕はいつの間にか兼務教員になって、授業の協力をお願いしたはずが、

年史編纂室に協力して書くことになってしまったという…。

授業開講の理由の2つ目のところですが、東北大学も固有の定員はあるのですが、年史編纂のためにポストを3つ付けたのです。終わったら、どうなるかという問題があります。そういうことで、これも当然、視野に入ります。

それから、やるとすれば、東北大学はいい史料館があります。ご存じかと思いますがすけれども、旧制の建物が残っていて、片平のキャンパスにあります。これは史料館で、このように定期的に展示会をしています。東大などは、安田講堂自体、記念館みたいなものですし、北大も古河講堂があったり、農学部の建物は戦前にできて、あれは上から見ると「北」の字になっているのです。そういうものもありますが、あまりこのようにきれいに残っているところは、私は少ないと思います。

それから、川内のキャンパス、青葉山のふもとは植物園もあって、なかでいろいろな展示もしています。だいたい大学のあるところが青葉山のふもとなのです。ここは仙台城もあったので、何か掘ると、武家屋敷の跡がどんどん出てくるのです。今、地下鉄の工事を始めているのですけれども、掘ってみたら武家屋敷が出てきたので、去年1年、工事をストップして、遺跡を全部発掘していました。文化財保護法で決まっていますから、記録をとっているのです。毎朝、出勤するときに、武家屋敷の跡を通りながら、かまどのあとや建物の跡を見ながら楽しんでいました。そこが終わってまた別のところを掘ったら、また出てきたので、今そちらをしていて、2年かかって地下鉄の工事がすこしも進まないという状態なのです。大学の周り全体が史跡に恵まれています。この史跡を生かそうとしたのです。

それから、ホームページを利用して質問への回答もつくっています。質問が来なかったのも、あまり生きていないのですが。

そんなわけで作ったのが、こういうシラバスです。最初はいきなりキャンパスの史跡散策から始まります。本当は授業をしてから、ではあそこはどのようなのか、見に行こうというのが一番いいのですけれども、なぜはじめてから散策したかという、1年目は後期から始めました。東北の秋というのは早いので、11月になるともう真っ暗になってしまうのです。開講時間帯が、16時20分からという非常に不利な時間なのです。ですから、もう最初のほうにしないと外を歩けない。懐中電灯を持って見なければいけない。それで、最初に2回散策して、僕が大学の歴史で、東北大学に限定しないで、日本全体の大学の話を、それから学徒仙台の話などをして、また僕が最後に戦後改革と新制大学の誕生をして、60年代の紛争をして、また東北大学の改革と未来という総括をさせられます。

なぜ来て1年目で東北大学の未来について責任を持たなければいけないのか、正直やりにくく、今年も最後、僕が講義したのですが、僕はしたくないので別の人にやってもらいます。僕の担当分だけでざっと授業内容をお見せしますね。第4回は、東北大学に限定しないで、大学の歴史全体をしています。大学とは何なのか、モデルはどこから来たか、ドイツモデルとか、いろいろな説があるけれども、現状はいろいろな機関が集まってできたという話です。東京大学はこういう大学であって、帝国大学はどのようにできてきたのか、貢献したのは森有礼と伊藤博文ですね、刎頸の友。このように、中等教育の進学者が増大し、高等教育へ波及し、高等教育機関の拡張が行われた

というストーリーです。

帝国大学というのはモデルであった、いろいろな特徴がある、このような学校制度体系になっていることも説明します。学生の学習や、もう一つのモデルとして私立大学も紹介します。これは、創設者の福沢諭吉（慶応義塾）と大隈重信（東京専門学校）と新島襄（同志社）ですね。しかし、国立大学中心主義という思想があったので、それとの戦いでもあった。これなどは、明治大学の授業でもぜひ使ってください。大正7年の大学令公布のところまでが戦前部分です。戦後の部分は、このような戦後大学改革の話をして、占領統治の仕組みとか、日本側の改革思想の話をしました。実は、今年から『大学と社会』という授業を放送大学で始めたので、そのときいろいろつくってもらった資料を、自分の授業だからいいと思ってかなり活用しています。『大学と社会』、これは今でも売っています。私の書いた本で唯一、印税が入る本ですから、ぜひ買って下さい。戦後の大学を作ったものは戦前からつながっているというお話を90分ぐらいでします。東北大学の状況ですね。いろいろな原資料を使って、東北大学はこのようにできたという話をします。

これは広島大学の資料なのですが、つくるときの努力ですね。広島大学では、記念野球大会などを行って、新制大学発足の資金を集めたのです。そういうものも残っていましたが、使わせていただきました。

授業評価ですが、学生の反応がいいのです。これは5択で書いていますので、3が平均値です。4だと「だいたいいい」ですから、4以上だととてもいいので、全部2年目のほうが上がっていて、「授業の意義」も4.5で5に近いし、総合評価も4を超えているというので、とても学生には評判のいい授業

です。終わったときなどは、学生が「先生、この授業は来年もするのですか。後輩に勧めます」と言ってくれました。ありがとうございますと言ったのですが、問題があるのですね。一番大きなのは2番目で、受講者が減ってしまいました。1年目は48人、実際に受けたのが38人ですね。今年が28人で、実際に試験を受けたのは22人です。なぜ減ったのかというので、僕らはすごく悩んで、年末に検討会をしました。飲んだだけなのですが。理由は、1年生向けだということで、前期に移したのですね。どうもこれがまじりませんでした。こういう話は2年生になってから聞きたくなるのではないかなというので、これも一つあるのですね。

それから、僕の悩みは、最後の戦後の部分を担当すると、結構、何をコアにして授業をするかというので、なかなかコアが見つからなくて、僕としてはとても困っています。最後はやはり東北大学の人に話してほしいということで、文系の名物、目玉教授に野家啓一先生という哲学の方がおられました。この方に参加してもらって、最後にお話をお願いしました。それでもやはり大学史を述べる時のコアやサーガが非常に難しい。はっきり言えば、私学で言われているようなアイデンティティーを高める自校教育というのは、私どもは考えていません。なぜならば、学生は所属大学のアイデンティティーに悩んでいません。入ったことで満足しています。満足しているけれども、彼らは自分自身のアイデンティティーは悩んでいるのですね。ですから、全学教育のなかでもう一つ、自分をつくるという授業があります。これは教育学部の教員がしているのですが、要するに、学生が今まで自分はどう生きてきたかという話を、希望者を募って前で話をさせて、それについて学生がいろいろと質問しあって、自分自身を省

みる。この授業はある意味恐ろしい授業です。高校生ぐらいになったら、もう自分のことを言うのは恥ずかしくて嫌ですよ。大学生が自分の生きてきた過去を話して、これからどのようにして生きるかなんて、300人ぐらい集まって高め合うのですね。世の中変わったなと思います。

東北大学の場合、大学院の進学希望というのが、1年生の時点で65パーセントなのです。実際にも大学への進学率が65パーセントなのです。理工系だと85パーセントぐらい。そこまでいって、自分は研究者に向かないと初めて気がつく。そこからアイデンティティーの悩みが始まるので、所属大学の関係のなかで、べつに悩みはないのですね。

それで、僕らは東北大学の歴史を伝えるということだけしか今のところ考えていないのですが、事実を教えることはあまり意味がないので、何を伝えようかという、大学のなかで一体、何が東北大学なのかというコアとか、バートン・クラークという学者が言っているのですが、サーガ、神話ですね。どの大学にも神話があると。この神話のもとに、学生も教員も職員も連携して、連合して、一つの大学のもとで活動する。神話が必要になるのですね。この神話が、東北大学ではなかなか見つからない。前にいた福島大学でも、広島大学でも、さっき言ったように神話は見つかります。大学人が何を中心に行動してきたかということがわかるのですが、東北大学も戦前はあるのですね。門戸開放主義と女子入学です。なぜ女子入学にしたかという、これは単純な話で、旧制高校の卒業生だけでは学生が十分集まらなかった。あまり崇高でもないですね。これも不純です。そのために、女子も入れて定員を確保しようとしたというのが一つと言

「歴史のなかの東北大学」授業計画

月日			担当
10/4	第1回	ガイダンス—歴史のなかの東北大学— 講義の目的や授業の方法等について解説	今泉
10/11	第2回	キャンパス史跡散策（片平キャンパスと史料館見学） 片平キャンパスを見学することで、東北大学からさらに旧制二高や仙台医専など明治期の諸学校にも関心を向け、大学の歴史に関する興味を喚起する。史料館で開催予定の企画展「東北大生の一世紀」をあわせ見学する。 < 集合場所：東北大学史料館（片平キャンパス）>	永田 曾根原 ほか
10/18	第3回	キャンパス史跡散策（川内キャンパス・植物園見学） 大学の歴史について学ぶ手はじめとして、受講学生が主に学ぶ川内キャンパスを散策・探検して、中・近世から近現代にいたるその歴史を体感する。 < 集合場所：東北大学植物園（川内南キャンパス）>	永田 曾根原 ほか
10/25	第4回	大学の歴史—東北大学について学ぶ前に— 東京大学・帝国大学や旧制高校の誕生など、近代日本における高等教育制度の展開について、特に戦前期の制度に焦点を当てて解説し、次回以降で詳説する授業の前提となる基礎知識を提供する。	羽田
11/1	第5回	東北大学誕生前夜—学都仙台の学生たち 東北大学の重要な前史をなす旧制二高を中心に、仙台医学専門学校・仙台高等工業学校やその他の私立系諸学校をも視野に入れながら、明治中期における仙台の高等教育機関を、「学都仙台」の形成という視点から解説する。	永田
11/8	第6回	東北大学創立百周年記念展の見学会（仙台市博物館） 仙台市博物館で開催される予定である本学創立百周年記念展「東北大学の至宝—資料が語る1世紀」（11/2～12/9）を見学し、学術コレクションの見学を通じて東北大学の研究活動の歴史を体感する。 < 集合場所：仙台市博物館 >	永田 曾根原
11/15	第7回	東北帝国大学の誕生 明治30年代からはじまる設置運動の動きから東北帝国大学創設までの経緯、創設当初の大学について、特に農科大学（札幌）との関係を軸に解説。澤柳政太郎・北條時敬など初期の総長たちの大学論に触れながら創設当初の「理念」について紹介する。	中川
11/22	第8回	附置研究所の誕生 臨時理研・鉄鋼研究所・金属材料研究所など、大正期の研究所設置とその背景について解説。さらに斎藤報恩会との関係など東北大学社会との関係についても触れる。	中川

月日			担当
11/29	第 9 回	総合大学としての確立—法文学部設置と図書館 法文学部の設置を中心に、狩野文庫やその他大量の洋書購入など図書館の整備発展、阿部次郎ら「大正教養主義」の代表的存在とされた教授陣等の人物像にも触れ、大正～昭和初期における東北大学の総合大学としての確立について述べる。	曾根原
12/6	第 10 回	東北帝国大学の学生生活 戦前の東北大学には、医学部自治会・法文共済部という学生消費組合（学消）があった。大学生協の前身ともいえるべきものである。本講では、ふたつの学消の活動を追いつながりながら、東北帝大生の生活、文化活動、思想状況等について論じてみたい。	柳原
12/13	第 11 回	「門戸開放」の学生史 戦前期東北大学の学生のもう一つの特色である「門戸開放」のあり方として、女子学生や留学生の歴史に焦点を当てながらその実像を解説する。	永田
12/20	第 12 回	戦時下の東北大学 東北大学の戦時体制や学徒出陣・学徒勤労動員など学生の状況についてこれまで明らかにされている事実を解説し、戦時下において大学がどのような問題に直面していたのかを解説する。	永田
1/10	第 13 回	戦後改革と新制東北大学の誕生 終戦直後の諸改革から新制大学の発足にいたる過程をたどりつつ、新制東北大学が掲げた理念と抱えた課題について解説する。	羽田
1/17	第 14 回	川内・青葉山キャンパスの誕生と大学紛争 川内・青葉山キャンパスへの移転を主なテーマに、高度成長期における大学の拡張や大学紛争等の問題と関連づけながら、1960-70 年代の東北大学の歴史を解説する。	羽田
1/24	第 15 回	東北大学の改革と未来 —総括— 80 年代以降現代に至までの東北大学の歴史を、各大学で本格化する様々な「大学改革」の流れの中に位置づけて解説し、創立百周年を迎えた現在の課題と展望について触れる。	羽田

今泉隆雄
永田英明
曾根原理
中川学
柳原敏昭
羽田貴史

文学研究科教授
学術資源研究公開センター史料館助教
学術資源研究公開センター史料館助教
文学研究科講師（百年史編纂室編纂員）
文学研究科准教授
高等教育開発推進センター教授

われています。

これは要するに、新設帝大が、先行する帝大に対しての対抗策だと思うのです。研究中心主義大学という言葉で東北大学は使っています。これもやはり、先行する帝大に対して、東京、京都に対して東北は何かということをも自己主張するための戦略であったと思うのです。

【大学作りのドラマは伝えたい】

ところが、戦後になるとそういうドラマが見つからないですね。恵まれすぎています。放っておいてもお金が集まってくる、文部省の指導、指示のもとに、どんどんいろいろなものが来る。さっき西山先生は、アイデンティティーを求める自校教育はどうも歪んでいるのではないかとおっしゃいました。私もそのとおりだと思います。そうなのですが、伝えたいのは、大学というのは教員も学生も職員も含めて、さまざまな努力や血のにじむ思いをしながら作っていくから大学になっているということだけは、絶対に伝えたいのですね。

私も大学教員、今年で30年目なのですが、30年のうち10年とは言わないけれども、それに近いぐらいの時間とエネルギーは大学の管理につき込んできているということです。それでいろいろなことができてきました。自分の研究テーマも変えて、時には管理のために必要な評価の研究などをして論文を書いています。そういう人間がたくさんいるから、大学が維持されてきているので、成功ヒストリーだけ書くのではなくて、どういう人間が努力をして大学を維持してきたかということだけは伝えたい。その伝えたいものがまだ見つからない。東北大学は大きな危機に遭遇しなかったと僕には見えるのですね。これは僕の勉強不足だと思います。まだ来て2年目なので、もっと勉

強すれば、たぶん東北大学の努力、大学人の意思が見えてくる。それが見えてくると、たぶん東北大学の歴史をすっきりと、学生たちにも伝えられるのではないかということで、不純でしたが、真面目にしているということだけのご理解いただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

○司会 どうもありがとうございました。私学とは違った恵まれた環境のなかで教育が行われていて、大学のアイデンティティーか学生のアイデンティティーというものを中心に考える視点も大切なことだと思います。

ちょっと時間が押しておりますが、今16時10分なので、遠方から来られた方には大変恐縮ですが、討論を16時20分から始めさせていただきますと思います。

<第三部 討論>

○司会 では、時間となりましたので、討論を始めさせていただきたいと思えます。

最初に、コメンテーターの寺崎昌男より、いくつかコメントをさせていただきまして、その後、皆様からいただいた質問用紙のなかから、すべてというわけにはいかないのですが、大変恐縮ですが、いくつか質問をお願いしたいと思います。

では、寺崎先生、よろしくお願いたします。

○寺崎 本学院本部調査役をしております寺崎と申します。よろしくお願いたします。

私は、今回のシンポジウムの企画に参加し、さらに今お話をうかがっていて、非常によかったですと思っています。今日のこの時間は、複数教員担当の（立教では総合Bと言いますが、その総合Bの）科目を受けたような気持ちがありました。先生方の、似ているようでそれぞれ違う角度からのお話を聞いて、満足いたしました。仮に授業評価を書けと言われたら、4.5ぐらいつけるのではないかと思います。特に最後の羽田先生の、最後まで一貫して「不純」なところに目を付けたお話を聞いて、人間というのは真面目に不純なことをするものなのだ、と思った次第です。さて、今日のお話のなかから、あと



の討論のためのヒントにもなるようにと思って、いくつかまとめてみました。

まず一つは、自校教育、あるいは自校史教育の目的ですね。これは3年前の第1回目から今日までつながっている問題だと思います。

第1回目は歴史教育なのか、あるいは教養教育なのかということが問題になりました。明らかに教養教育であるという方と、いや、歴史教育の一部であって結構なのだという方とおられました。正確に言うと、大学のカリキュラムのなかで何を目的とする科目群の一部であるかということですね。それは今日もまだ論点として残っているように思います。

私自身としては、目的は歴史の分析を通して自校に関して認識を深めることにあってお願しております。つまり、私の場合、関心は愛校心養成とか、一体感の形成という問題ではなくて、むしろ知的な形成の問題、つまり認識の問題として考えているということです。情動の問題としてではなく、認識の問題として自校教育の目的を考えているということです。

先ほど西山先生が紹介されましたけれども、IDE誌で報道されたIDE協会の京都でのイベント、あれは「愛校心を育てるために」という題のシンポジウムなのですね。私は出演者の一人でしたけれども、「私はそうは考えておりません」ということを主張しました。今申したとおり、私は「歴史教育を通じての教養教育」だと思っています。

けれども、受講する学生の動機ということに目を置くと、違う問題が出てくるように思います。やはり愛校心が求められるチャンスもあるということは、別府先生がお配りになった『明治大学広報』に示されています。学生の一人がこのように言っています。「受講のきっかけはバイト先の寿司屋で明大

OBのお客に、『校歌が歌えない』と話したら激怒されたからだ。書いたのは、文学部3年の女子学生なのですね。かわいそうに、そんな目に遭っているわけですよ。これはやはり愛校心の話ですね。

でも、どなたかもおっしゃいましたが、けれども、愛校心育成を目指すなら、方法として授業をする必要はないのではないかと思います。その時間休講にして、みな神宮球場に行きましょう、神宮に行ったら出席をとるよ、ぐらいで結構ではないでしょうか。他方、授業という形で自校教育を受ければ、結果において、この子はちゃんと校歌を歌えるようになるかもしれない。でもそれは結果であって目的ではないと思います。それが第1点です。

2番目は、歴史を媒体とした自校への認識の深化ととらえた場合に、その歴史の中身は何であるべきかということが、やはり大問題だと思います。

学生たちは、歴史が自分の生き方に何を語りかけてくれるかをやっぱり期待します。多くの学生は普通、歴史の学習は暗記だと思っていますが、暗記ではない、自分に対して、また生き方に対して何かヒントがあると思ったときに、歴史教育は本当の歴史教育になるのではないのでしょうか。

私は、自校教育は実は学士課程教育全体の構築の一部分をなす、と見た場合に、初めてカリキュラムのなかに落ち着くのではないかと考えています。この点で、学生とくに新入生たちの固定観念を揺さぶることが大事なのです。たしか西山先生がおっしゃったと思いますけれども、そういう構えは非常に重要だと思います。学生たちは、高校から大学に来るときに、ほとんど高校までの学習意識を変えないで来ます。それを変えるきっかけを準備することは、非常に重要で、たぶんそ

の一助に自校教育は入るのではないかと思います。

余談になりますが、某旧帝大の院生が私の周りにおりまして、ドクターの学生ですが、この前からテレビで東大の安田講堂落城を何度も放映していたのを見て、わからないことばかりだと言うのです。本当にわからないのですね。例えば、「どうしてヘルメットの色が違ったのですか。あれは好みですか」と。ファッションだと思ったのです。ファッションで色を白にしたり赤にしたりしたと思っている。そうした学生たちにはやはり、紛争とは何であったかと正面切ってまず教えないといけない。その次に、それは今とどうかわるかを教えるという順序になっていくと思います。

要するに私は、アンダーグラデュエートの教養形成にとって、すべての授業科目はどのような役割を果たすか。そのなかの一つとして自校教育はどういう働きをするかと考えていく必要があると思います。

あとは簡単に申し上げます。

一つは、今日ここであまりお話にならなかったことですが、自校教育をすることによって学内の体制はどのような影響を受けるか、また変えられるべきかという点です。例えば京大の学徒出陣の場合、学生部の協力によってできたというお話がございました。その他、いずれの方も例外なくアーカイブスとの関係で自校教育が成り立っているということにお触れになりました。こういう問題はもう少し強調されるべきだと思っています。

実は私が絶えず言っておりますのは、例えば歴史教育は自校教育科目内容の半分ぐらいにして、残りを「この学校の特色」というような内容に6時間ぐらい割り当てるとすれば、そこへ同窓会、あるいは図書館、その他、学生部

の方、こういう職員の方たちの協力を得られるのではないか。それはまた、この上もないSDの機会になるのではないか。私どもが教養教育の組織をつくりあげましたころ、職員の方の力なしには本日この会を主催している全学共通カリキュラムはつくれませんでした。その後もまさにそうです。そういう点では、自校教育と職員の方との関係という論点が出なかったのは、寂しい気がいたしました。

次に、学生の行動変化の問題がごさいます。今日のシンポジウムの前の懇談で、話題が出たのですが、各大学、特に私学では、個別の大学ごとに学生の意識はやはり違うのですね。

例えば立教のような大学の場合、学生たちは早慶に行きたくて行けなかったからここにいるという感じをものすごく持っています。それは、立教大学が良きにつけ悪きにつけ、一応、大学のなかの上澄みにいるからです。上澄みのところではその問題がある。他方、よその大学に行くということなど思ってもいなかったという学生だけがいる大学もある。何しろ、52パーセントの高率で今、大学に来るようになったわけですね。この全入時代にうんと増えた学生たちをお引き受けになった大学の場合はどうだろうか。不本意さの中身が違うということがあります。

自校教育が成功的に展開していく場合は、やはりそれぞれの大学がどういう学生の構造をなしているかという認識が不可欠であろうと思っています。

最後に感じたのは、どのお話をうかがっても、その一番先にあるのは何かというと、「大学とは何か」という問いなのだということです。それから、自校史と言っても、実は大学史一般と切り離せないということです。これは特に羽田先生のお話のなかに非常にはっきり出てきたと思います。自校史教育

の何よりの基盤は、大学というものの構造や本質に対する理解だと私は思います。そういう点では、自校史教育というのは大学教育の総体に対して大変大きな変革のきっかけを与えたいと思います。

私は昔、社会科教科書の編纂をしておりました。20年以上、従事いたしました。そのころ、同じ問題があったのです。

社会科教育で地域を学ぶ。どの授業でも先生方は、特に小学校など一所懸命実践をされている。ところが、二つ問題がありまして、地域を学ぶことを通じて日本を学ぶのか。それとも、地域そのものを学ぶためにきちんと地域を学ぶのか。地域を通じて何かを学ぶのか、地域を学ぶのか。この問題がずっとございました。それと同じ問題が自校教育にはあると思います。

私は両方の機能を持っていると思います。つまり、地域を通じて日本を学ぶ場合にも、地域の学び方というのがあるということですね。くわえて、地域を通じて日本を学ぶというときの日本像というのは、実は地域をどれぐらい本気で学んだかによって左右される。それと非常によく似た関係が、自校史と大学史一般とにあるのだなとあらためて痛感いたしました。非常に勉強させていただきました。ありがとうございました。

○司会 それでは、何人かの方から部分的に重なる、完全に重複する、もしくは関連している質問をいくつかいただいております。岩手大学の大川一毅先生、いらっしゃいますでしょうか。代表して、いただいた質問、コメントをお願いできますでしょうか。

○大川 岩手大学の大川でございます。本日は興味深く聞かせていただきました。

実は私、科研費をいただきまして、自校教育の実施状況をアンケートしまして、この会場にもご協力いただいた方がいらっしやると思いますが、その結果をちょっと簡単に報告します。昨年8月に全国の大学にアンケートを送りまして、「貴学様は自校教育をしていますか」と聞きましたら、400校ぐらいの大学からお返事をいただきまして、そのうち約140校の大学から、「うちには自校教育をしています」という返事が来ました。授業数だと196授業ありました。すごいなと思ったのですが、実は自校教育の授業というのは、「フルパッケージ」でしていないのですね。各大学は、15時間、または7時間ぐらいの授業計画を全部、自学をテーマとしているのではなくて、「初年次教育」として実施している授業計画の3時間ぐらいを自分の大学のことについてする。そういうかたちでの授業を「自校教育」と位置づけています。「フルパッケージ」でしている授業として確認できたのは、だいたい60前後ぐらいだと思います。

そうしたなかで、アンケートで明らかになったのは、各大学が課題として求めていることが、「自校教育の成果をどこに求めるか」にありました。「大学評価」が一般化して、「教育の成果、質の保証」が問われるなかで、「自校教育の成果、質の保証をどこに求めればいいのか」が大きな課題になっています。特に自校教育は複数の先生がリレー形式で担当する場合が多いので、先生によって話がばらばらで、最後の成績評価のときにはどうすればいいのか。自校教育授業について、何をもって教育成果と言えいいのか非常に困惑しているという現状があります。

あるいは、自校教育の授業が増えていくなかで、必修授業としている大学も結構あります。特に初年次教育授業

のなかに位置づけている自校教育です。多くの大学にとって、入学者は必ずしも第一志望での入学ではない、あるいはその大学がいわゆる「偏差値の高い大学」ではない。そうした場合に、自校教育授業について「学生への動機づけということに非常に苦労しています。どうしたらいいでしょうか」という質問記述が、アンケートには結構ございました。

自校教育が浸透しているなかで、アンケートの回答から気がつきましたのは、「大学の歴史」だけで自校教育授業を「フルパッケージ」で構成するのは難しいのかなど。特に地方国立大学や公立大学の自校教育は、「地域と大学の関係」を「コア」として自校教育をつくっている。公立大学などはほとんど「地域のなかでの自分たちの大学や自分たちのあり方」というのを自校教育の大きなテーマにしています。まだ創立してから5年10年の大学では、自校教育授業も自学の歴史だけではなくなかでなく、「大学を通して地域のあり方を考える。地域を通して大学を考える」ということをしています。

もう一つ、「学士力」というのが最近よく言われますけれども、アンケートで「貴学の自校教育を『学士力』という側面を考えるならば、どのような力量を育成していますか」という質問をしたら、「社会情勢や自然、文化の理解」というのが最も多い回答でしたが、その次に多かった回答は「倫理観」の形成。自校教育で「倫理観」を学生に伝えたいというのですね。大学のあり方、あるいは大学の建学の精神をふまえて、自分の生き方、あり方を考えさせていく。こうした側面での「倫理観」の形成という「学士力」につなげていきたいということを言っている大学があります。

最後にもう一つ言っただけです。

びっくりしたのは、自校教育を導入しているという大学には、医療系大学や福祉系大学にも多かった。全部フルパッケージの15時間をするわけではないのですが、例えば「医学入門」とか、専門教育の導入科目のなかで、自学はどのような理念で医療にかかわるか、どうい建学の精神で福祉にかかわるか。大学の「建学の精神」という自校教育をスタートにして、医学の概論を始めていくというところがありました。

まったく質問になっていなくて、自分で質問が何だったかわからなくなってしまいました。そんなことをご報告させていただきます。長くなってすみません。



○司会 大変整理された質問だと思います。成果の質の保証が問われているなかで、科目の成果をどうするか。それから、今日来ていただいたような旧制帝大と地方国立、私学では学生のレベルもずいぶん違いますので、求められているものも違う。それから自校史教育だけで自校教育というものが尽くされるのか、つまり歴史のみならず大学の現状、今の大学自体を教えるということはどうお考えになるか。そのほかの点について、お答え、ご意見をいただければと思います。では、羽田先生からよろしく願います。

○羽田 総合科目ですと、どうしてもばらばらになるので、私は80年代に平和問題にかかわったこともあって、

「現代と平和」という総合科目を5年ぐらい主催して行った経験があります。そのときには、全部授業に出ていたのです。学生と同じ目線で話を聞いて、アンケート用紙を回収して、整理して、ここがポイントです、今回はここをよろしくお願しますと連絡係をしました。そういう人が絶対にいないと、総合科目の質は高まりません。それにすればいいのではないかと。ただ、これは負担が大変ですよ。そうしたくないのでリード方式にするわけですから。しかし、一つそういう方法があります。

必修科目にしたら動機づけがなくなるというのは、あらゆる教養科目はそうです。ですから、必修科目から外せばいいのだと思います。かような話ではないかなと思います。

僕は寺崎先生のお話の問いかけで言いたいことがあるのですが、誰に対して問うかという点で言うと、私の思いのなかでは、アイデンティティーの問題で一番悩んでいるのは大学の教員です。一番聞きたいのはその人たちと思います。特に大学を運営している人たちに一番聞かせる大学史が必要になります。なぜならば、今、日本の大学教員の4割は大学以外から来るのです。企業、官庁、研究所から来る。大学教育とは何かわからない。自分の大学のイメージで来る。その結果、大学のなかで、大学人の大学のイメージ、大学とは何かがぐちゃぐちゃになっているところに根本的な問題があって、学校と同じように大学パッシングがずっと続いていますから、大学人が自信を失っている。一番失っているのは国立大学の学長かもしれません。国立大学とは何かについて、迷いがありになる。この人たちを元気づける研究と対応が必要になる。

そういうものをきちんとするなかで、

本質的に重要なのは、寺崎先生の言われた、大学とは何かということについての歴史の研究なのだろうと思います。

それで、学生に教養教育として教えるということの意味は、実は私どもも教養が必要で学ぶけれども、学生に対する教養教育は、普通の教養教育ではなくて、青年が自己形成をするのに必要な教養教育であるということと考えれば、学長に対して言う話を学生にしても意味がないので、それに合った枠組みと内容をつくる必要がある。アプローチはたくさんあるのですが、それはやっぱり学生論から迫る必要もあるかもしれない。それから、大川さんがさっき言われた、倫理観を育てるものとして指摘されたのは、ああそうかと思ったのは、これはただの倫理ではなくて、職業倫理なのですね。職業倫理として自分たちがどのように大学で学んで社会で生きていくかという職業倫理を育てる枠組みのなかで、その大学でどう学んでいるかということ指摘されているのではないかと思います。職業倫理というところちょっと狭いのですが、やはりそれは、人間が大きくなっていくと、自分が生きていくだけではなくて、社会に対してどうかかわって生きていくのかということのあり方が人の道であり、職業を通してというのが職業倫理なわけですから、そうした場合は、教養教育のなかでは柱になると思います。

ただ、どういう内容がどういう倫理を育てるかということも、もう少し考えていただきたいと思います。私は、それはもちろん東北大学でも必要なことだと思います。それも初年次ではなくて大学院かもしれないし、4年生かもしれないし、大学のカリキュラムやいろいろな行動のなかで、各大学が学生の実態をふまえながら考えていくことで、一律の解はないのではないかと思

います。

特に1年生で入ったときには、あまりそういうことは考えたくないという傾向があるものですから、私はやはり2年生でちょっと落ち着いて周りを見て、なぜ自分はここにいるのだろうというときに、ひょっとしたら自校教育と教養との接点が生まれるのかなと思います。

○司会 少しこのところは、大川先生はだいぶと整理をされていらっしゃる様子です。まず「教育の成果、質の保証はどこに求めればいいか」、「成績評価の基準は何か」、「授業の動機づけはどのようにするか」。それからもう一つ、これは大切だと思うのですけれども、「自校史教育だけで十分なのか。大学の現状、大学とは何かを伝える自校教育ということと自校史教育とは、直結はしないのではないか。自校史教育だけでは足りない部分があって、自校教育というのは大切なのではないか」、それから、地方国立大、国立大、ここは私立大も含まれると思いますけれども、「自校教育のコアは、特に地方では地域である。そういうことをどう教えるか」。それから、やはり「アイデンティティー、愛校心のための授業があってもいいのではないか」と積極的に質問を書かれていらっしゃいます。このあたりは、所属する大学によって意見にだいぶずれがあると思うのですが、一般的なお考えと、ご自分の大学に照らし合わせてご意見を頂戴できればと思います。皆さん、ご意見いただけますでしょうか。

○山口 多岐にわたる質問ですので、当然、すべてにはお答えできません。今、頭に思いつくところでいきますと、評価の問題というので、名古屋大学の場合は実際どのように評価しているかということだけを簡単にご紹介させていただきます。

もちろん自校史教育、「名大の歴史をたどる」の評価は筆記試験でできるわけではございませんので、レポートの提出を求めています。『コースパケット』にもたしかそういったものがあつたかと思いますが、レポートを書かせます。そのレポートは、実は二つテーマがありまして、出席を確認する意味からも、筆録をとるというわけではないのですが、自分が自校史教育のなかで聞いた講義、自分が聞いて記憶に残っている講義を再現してみる、少しまとめてみなさいという内容になっています。分量はさほど多くないのですが、そういったものが一つあります。これは基本的なレポートの課題です。

さらに発展的なものとして、「名大の歴史をたどる」を受講して何か感ずるものがあつたとすれば、ぜひトライしてもらいたい発展的な課題があります。今まで知らなかった名古屋大学のこんなことが目に入るようになりましたとか、ちょっと調べるとこういうことがあつた、授業では触れられなかったけれど、自分で発見した名大の歴史というものがあるはずなので、それを資料・文献を使ってレポートしてくださいという発展的なレポート課題です。基本課題レポートは必修扱いで、発展課題レポートについては、それなりによく調べている、資料を駆使して、史実に基づいて、一応自分なりに現状を歴史的な点で理解できるようになったということを見せていただくということです。これは2年ほど前から行うようにしています。とりあえず事例の一つとして報告いたします。

○豊田 そうですね。質問の内容がたくさんありましたので、私もまず評価というところからお答えしたいと思います。私自身、先ほどもお話ししましたように、歴史を専門としている者でありまして、やはり先ほど寺崎先生が

おっしゃったように、歴史は暗記物ではないというのが基本にあります。ですので、別の科目でもそうですが、基本的には授業のなかで歴史を通じて頭を使ってもらうということに置いております。ですので、テーマ自体も、自分の大学の歴史についていかにたくさん知識を得たのかということ进行测试で測るわけでは、当然ありません。授業でどのぐらい真剣に取り組んで頭を使ってくれたのかということ、最終的にはレポートというかたちで課すということをしています。

立教の場合ですと、今年で創立135年という長い歴史を持っておりますので、歴史だけでこのような授業が構成できるのは非常に幸せなことだと思っています。それだけの長い歴史を持っていますので、やはりさまざまな出来事があります。ですので、先ほども紹介させていただきましたように、愛校心を形成するということを前面に押し出さなくても、そういったいろいろなものを伝えることによって、結果的にそういうものにつながる可能性もあるのだなというスタンスでしていますので、私自身はあまりそういうものを前面に出してするということになると、やはりちょっといかがわしいのかなと、私は個人的には思っていますので、そういうことはたぶんしないだろうと思っています。



○西山 どれだけの質問に私が答える

のが適当かどうかよくわからないので、一つだけ実際の例をお話ししたいと思えます。

今日は本論とはまったく関係がありませんでしたので、このことには触れませんでしたでしたが、実は私は去年まで関西の別の私立大学で非常勤をしていました。その大学は、いわゆる偏差値で言えば非常にぐっと低い大学です。ただし、もう3回生で、文学部ということでしたから、結構受講生は限定されてはいるわけです。そこで何を教えようかといったときに、大学の歴史というテーマを立てました。その大学自体は戦前、1920年代に専門学校で、戦後の新制大学がたぐさできたところで大学になったという大学ですが、講義としては、大学の歴史をずっと追いつつ、該当する年代になったときに、その大学ができた、あるいは新制大学になったという話を1コマずつぐらい入れ込む。そういう話で構成したのですね。

全体の構成は、基本的には今日ご紹介した教材の話とそう変わるわけではなくて、例えば大学紛争などは、もちろん資料の数はぐっと減らして、語り口もソフトに、スピードも3倍ぐらいゆっくりしゃべってしますが、中身はほとんど、そう変わる内容の話ではないのです。学生の反応もそんなに悪くなくて、年々、受講生も少しずつ増えていって、わりと私もしていて面白い講義でした。

これはつまり、学生たちにとってみれば、どの大学だということ限定するのではなくて、それぞれの時代に、今の自分と同じ年代の若者たちが何を考え、どういうことを悩み、どう行動してきたのかということの軌跡をたどっているのですね。そのなかで、では自分たちがこれから、先ほど寺崎先生が、歴史を軸にした場合、何を語り

かけるかということをおっしゃいましたけれども、ですから、提供する資料は、当然、京大の資料はぐっと減らしてもっと一般的な資料を増やすのですけれども、そういうなかで、自分の大学という枠にとらわれずに、若者たちが、自分と同じ年代の人間たちが何を考えていたかということ肌で知ってもらう。それで十分なのではないかなと。私は逆に、どうしてそこまで自分の大学の枠にこだわるのかと、私はむしろそのように申し上げたいと思います。



○別府 三つほどお答えしたいと思いますが、まず第1番目、評価の問題ですね。これは、私は評価とする立場として、やはり出席を重視しています。出席です。これは、事務局が出席者名簿を私にくれますから、それを評価の一つの基準にしています。それから、自分の大学の歴史についての試験をします。試験といっても持ち込み可で、資料も全部持ち込んでいいことにしています。学生はみんなめいっぱい、時間いっぱい書きます。そういうことで、オール出席であれば、たいいてい評価は、単位は出すというようにしています。

よくできる人はきちんと書いています。そういう人にはいい評価をあげています。ですから、昨年ありましたけれども、一度も授業に出ないで試験だけを受けている学生は、僕は遠慮なく不可にしています。このようにして評

価をしています。

2番目は、今ほど寺崎先生がお出しになりましたけれども、認識の問題があります。認識によって行動を変えたとおっしゃいましたが、具体的に言いますと、うちの明治大学は、名古屋の名大ではなくて東京の明大、私学の明大ですけれども、1月17日が開学記念日なのです。僕が初めて赴任したときには、1月17日も休みで、11月1日も休みです。なぜそうなっているかを、学生は知らないわけですが、現実には休むのです。ですから、なぜだろうと問題提起をしますと、学生たちは自分が経験していることですからよくわかるわけですよ。だけど理由はわからない。1月17日は東京府が明治大学に大学をつくっていいよと書類をくれた日。1月17日に許可がおりたから、その日を開学記念日にしているのだよと教えます。11月1日は、開学記念祝祭日。そういうことで、きみたちは両日とも休むことになっていると言います。

以上は、自分の大学のことですけれども、なぜ学割はあるのだろうかと問題提起します。これは、大学の歴史で言いますと、中世において交通税とか、たべものを安くしたわけです。その名残が学割にもあらわれていると思います。それから、みんなは4年間たって卒業すると学士になるよねと言います。ところが、学士を出せない高等教育機関もあるのだよと教えます。例えば、防衛大学校とか海上保安大学校は学士が出せません。ですから、学位授与機構という別の救済の機構があるのだよと教えます。大学の基本的な機能は、これは明治大学に限りませんが、学位を出すことなのだよと教えます。このように、現象面から実際に学生諸君が経験していることで歴史的な理由づけをすると、非常に理解が進みます。

そういうことを申しますと、やはり

自分の大学の歴史の知識を与えることによって、行動がわかったり、背景がわかったりする。広い意味の教養教育の一環だと私は思っております。以上三つです。

○折田 もう先生方がほとんどお話をされましたので、私は特別にはごぞいませません。ただ感想めいたことを二、三、申し述べますと、先ず成績の評価ということですが、これは基本的には名古屋大学の山口先生のお話と同じように出席重視です。それから授業期間中の半ばと終了後にレポートを提出して貰います。寺崎先生が「レポートの書き方」ということを書かれておられますが、あのレポートで、要するに感想文ではないということです。ただし、実際にはほとんどが「優」です。自分の学生時代の不勉強を思い出しますと、よほどふざけていない限りは「不可」をつけることはありません。

それから、アイデンティティーのことですけれども、これは九大が歴史的にアイデンティティーを持ちにくい大学であるということを持ち出したものでして、授業自体にそれを求めたことはありません。先ほど山田先生も言われましたが、私の学生時代なら受講はしなかつただろう。おそらく私達の時代であれば、ヘルメット姿で“粉碎”されるようなタイトルだと思います。

しかし、自分のいるところを知っておいても損はないだろう。この点は前回のお話とあまり変わらないのですけ



れども、やはり自分のいる大学を知っておく必要はあると思います。歴史屋なものですから、知らない、時代が変われば騙されるかもしれないという、そういう気が今でもしております。まずは自らのいる所を知る、そういう視点ですかね。

それから、自校教育と自校史教育との関係ですが、それはどちらでもいいような気がいたします。自分自身が歴史をやっているものですから、いろいろなことはできない。先ほども報告しましたように、「伊都キャンパスを科学する」(総合科目)の中で1コマだけ担当させて貰っておりますが、これなどは自校教育の中での一活動だと思います。そういうような形で入っていけばよいのではないかと。だから、歴史にこだわっている訳ではなく、それは私自身が九大史をやっているからだということでございます。言い換えれば、それしかできないということですから。

あとは付け足しですが、西山先生も言われましたが、私も他大学で非常勤(講師)をしたことがあります。それは「日本史」の講義で、工学部の学生さん達を相手に日本の通史をやるのですが、寝られてしまう。私はもともとは日本中世史でしたので、その辺りを詳しく説明したりしたのですが、半分ぐらい寝られてしまった。そこで起こす勇気がないものですから、「日本史」ではありましたが講義のなかで半分(半期)ほど、出講先の大学の歴史、いわゆる自校史教育をやりました。そうしたら学生さん達はよく聴くのですね。その大学はユニークな学校で、予備校がつくった大学なのですけれども、そのような話をすると皆さんよく聴いてくれるという経験をしました。全くの感想ですが、そういうようなこともございました。

○司会 あといくつか、重なる質問、お名前を挙げずに少しまとめて言わせていただきたいと思います。自校史教育だけではなくて、自校教育というか私たちはないのか。大学のレベルで学生のアイデンティティーの迷い方は違うのではないかと。レベルの高い大学だけの話と、地方国立、私学は違うのではないかと。それから、大学アーカイブスというか、資料館が自校教育、もしくは自校史教育に果たす役割は何か。裏を返せば、大学アーカイブス、資料館がない大学では、どのように自校教育もしくは自校史教育を展開したらいいか。あとは教職員の職員のかかわり方。自校史教育に職員がかかわると。それからもう一つは、自校史教育を職員に対してするという事についての学生との違いということについてご意見はないかということなのですが、どなたか少し手を挙げて。全員とするともう時間がありませんので、寺崎先生、何かひとつ。

○寺崎 最後に、まとめて意見を言うてほしいというお話でしたが、まとめてというより、勝手な意見を申し上げます。

一つは、先ほど出てきた自校教育にせよ自校史教育にせよ、1年次生がいいか2年次生がいいかという話がありますが、私は羽田先生と同じで、やはり2年次生がいいと思います。落ち着いて来ているところだということと、「おや、ここは、どうなっているのか」というような疑問が生まれている時期なのです。それから、聞いてみますと、2年次生になったころには、よその大学に行った友だちと会って、お互いに情報交換をしていることがいっぱいあるわけですね。そうすると、「立教はこういう大学か」と初めてわかる、ということがあります。私はやはり2年次生説です。

私が現職でいたころに、最も感動的な感想文をよこしてくれたのは、4年生でした。「もうすぐ卒業しますが、最後にこんな話を聞いて、ありがとうございますございました。私は大嫌いだったこの立教大学がものすごく好きになりました」と言ってくれたのです。それまでなかった感想文でした。こういう点を考え合わせても、私は2年次生が一番いいような気がいたします。

2番目は、先ほど大川先生のおっしゃった「アウトカムをどのようにするか」ということですが、その質問は、中教審の答申に影響されているのです。アウトプットではなくてアウトカムを出せとうんと言われている、これから4、5年そう言われ続けるでしょう。

私は、一つ一つの授業にアウトカムを出せと言われても、そもそもそれを審査するほうは審査できるのだろうか、不思議に思います。もしいわゆるアウトカムが気になるのなら、先ほど折田先生がおっしゃいましたね、就活に役に立つというお話がありました。会社が採用するときに、面接の一つに必ず、「きみの大学はどのような特徴がありますか」という質問を入れてくれ、というのが一番いいですよ。学生はみんな自校教育を聞きますよ。外部社会のほうがむしろ大事で、私はあまり気にすることはないと思います。神宮球場に応援に行く人数がちょっと増えるかもしれない。わかるのはそれぐらいのことです。

3番目に、自校教育ないし自校史教育は基本的に「授業」だということです。これは大変な利点だと思います。私が昔、立教の話をしていたころに思ったのは、総長やチャブレンの入学式のお話は、ほとんど何の教育的効果もないということです。学生はそんなこと忘れ果てています。創立されたのは明治7年だ、総長がちゃんと入学式

のときにおっしゃったと言っても、誰もそんなこと覚えていないですね。ところが、授業だとわかるのです。授業だときっちり言うことができる。要するに、授業というものの持っている利点を考えて、活用すべきだと思います。

幸い大学の講義というのは、別府先生にお尋ねするまでもなく、ドイツではアカデミッシュ・フライハイの一部なのです。何を言ってもいいということになっています。そのなかで真実を伝えるべきだと思います。

私は、立教で1973年に起きた一大セクシュアル・ハラスメント事件について、戦後の立教をしゃべるときに触れざるをえなかった。その事件のことも、まるで関口宏になったように詳しくしゃべりました。学生はそれで立教を嫌いになったか。そんなことはありませんでした。目を丸くして、本当に面白そうに聞いていました。何のマイナスもなかったですね。当時、金沢から来た女子学生たちとコンパをしましたときに、「あなたたち、大学を受けるときにうちで反対はなかったの」と聞いてみました。東京に出てきたら駄目だとか、立教は特に駄目だと言われなかったか、と。「いいえ」という返事です。何とおっしゃったの、と聞くと、「そんな素敵な先生がいたらお母さんにまわしなさいと言われました」という反応でした。私はコップを取り落としそうになるぐらいびっくりしました。

学生たちは、当時もそうだし、今もそうなのですが、自校に関して悪い話、歴史的に恥ずべき話を聞いても、それだからといって今いる大学を嫌いになるわけではありません。いる大学はそういう大学かというのがわかるだけでも、実は楽しいというか、満足するのです。安堵感だと私は思っています。満足感ではなくて、安堵感を得るので

す。「私はいまどこにいるか」という理解が深まることを通じて、自分は何かがわかっていく。そういう意味では、自校教育は明らかに教養教育の一部だと思っております。

○司会 何かご意見はございますか。

○羽田 さっき山田さんが言われた質問は、われわれには答えられない。つまり、その話はやはり学生と深くかかわってみたいとわからない。別府先生は学科に属しているけれど、私もセンターで初年次教養教育中心で、大学院もしていますけれども、文書館というのは、基本的に施設であって、授業をしているけれども、学生を1年から4年まで見ているわけではないので、その成長プロセスを全部見たうえで自校史教育がいいのか、自校教育がいいのかという選択肢のなかで判断できていないのですね。だから、折田先生の言ったとおりなのです。われわれが自校史教育しかおそらく選択肢はない。どう使っていくかは、むしろこの議論でしょう。

僕は前に広島にいたとき、福島で14年半教員をしていましたので、おおよそのことはだいたい、20年前ですが、染みついているのと、広島でも大学にいるときに、教育学部で「総合科目 大学論」というのを4年ぐらいしました。これは、歴史ではなくて、僕は大学政策財政制度論をして、だから歴史は僕にとっては、ダブルメジャー、トリプルメジャーの一つぐらいです。それから言うと、さっきの問いでいけば、自校史教育に限る必然性は、私はないと思います。むしろその枠を離れたほうが、初年次教育としていいものができるだろうと思います。でも、それはこの命題ではないので、それで終わりたいと思います。

○司会 ありがとうございました。今

日の講演記録はその筆録と、登壇者の方に改めてお願いいたします原稿と共に立教大学から出版の『大学教育研究フォーラム 14号』掲載させていただきたいと思います。また同時に、頂戴したご質問は、名前を伏せたかたちで整理をいたしまして、『大学教育研究フォーラム 14号』の中で、登壇者の方からフィードバックをいただく機会を作らせていただきたいと思います。書いていただいたものは必ず無駄にしないようにいたしますので、よろしくお願いいたします。

本日は時間が延びて大変申し訳ございません。皆様の遠方よりのお越しありがとうございます。それから、登壇者の方々にはご無理を申し上げ、お引き受けいただき、大変ありがとうございました。

また、内輪で恐縮でございますが、短くない期間、準備を熱心にごくださった立教の全カリ運営センター事務局の皆さんにこの場で感謝をさせていただきますと思います。皆さん、どうもありがとうございました。

(終了)